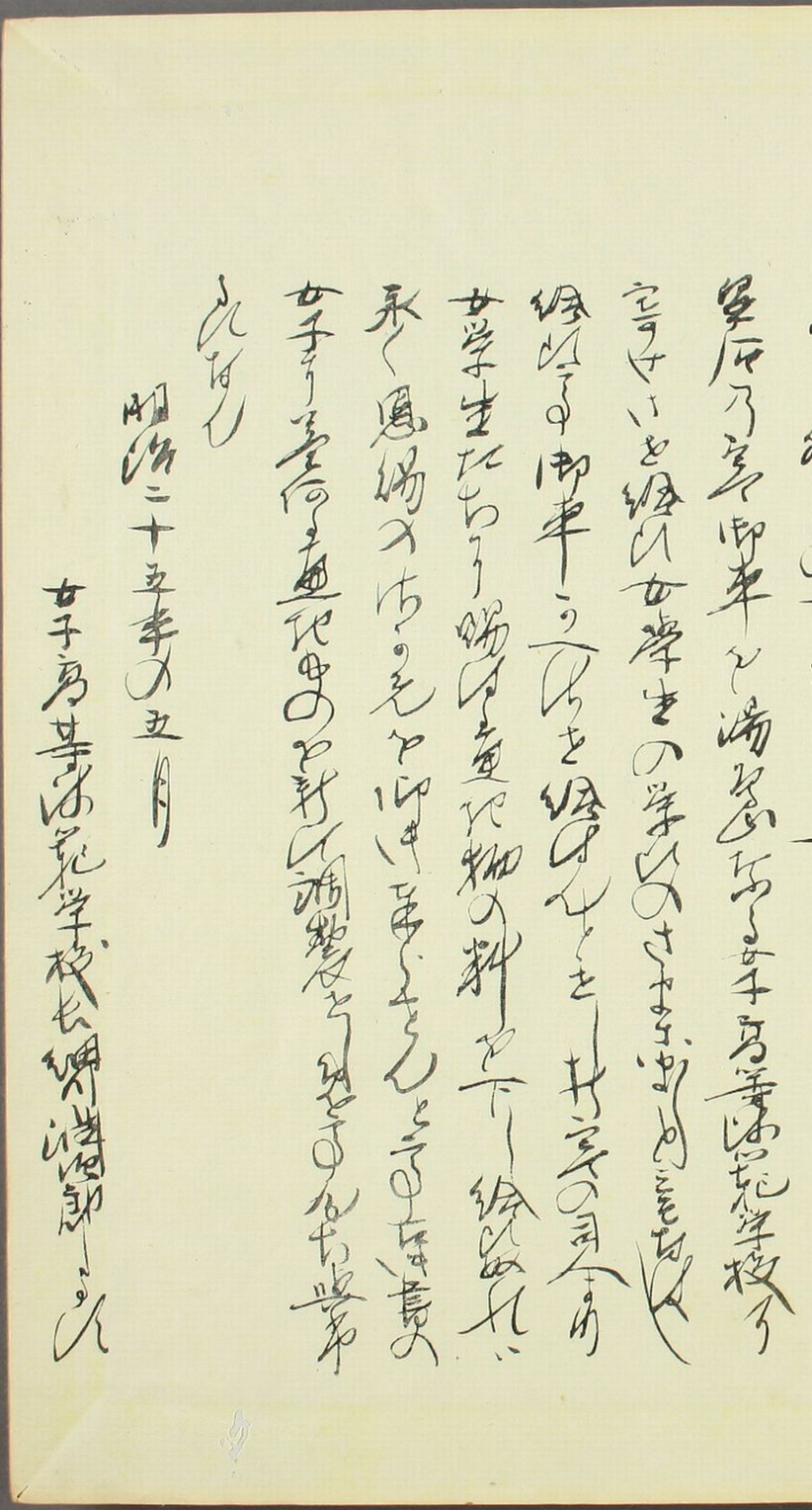
土左日記考證

2

岸本由豆流著

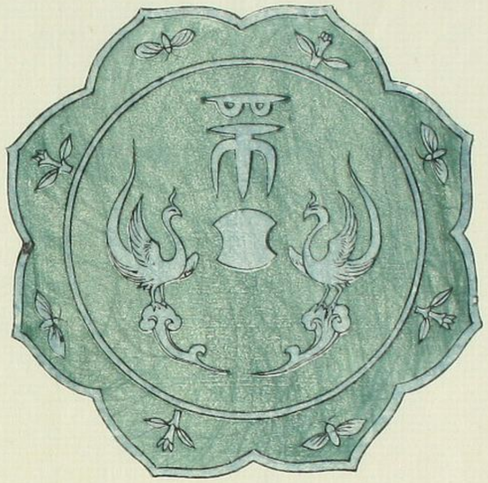
圭右日記考證

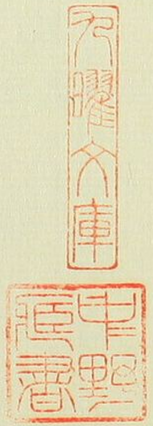
東京出林千鍾房
金花畫梓



明治二十五年五月

女子高等師範學校長 嘉納治五郎





玉佐日記考證序

案嘗謂著作之家有先鳴者有後興者先鳴固難而後興者尤不易矣注書家亦然凡古書艱解初佹注釋不手最難故韓不免紕謬人不能沒其功也至後出則可參証苟非考証

精確援據博洽深窮原委明析條
貫別未能免於是非吳議矣頃著岸本
大隅著土佐日記考證一編先皇人見
民為之附注此書以為之枚而字此編
製美至於分疏古言解釋名物字句
甚考証之精援博洽博也殆亦沒出
之選史歌案結髮之老往業乎
望朝事祈制度略淂主校堅而古
言之奥旨以為詳細將来能亨通
之依先編讀是記加之涯禮即慧
集幡照閣西芳探索到愛了然

公子豪惠同学嘗田小補之哉昔寄
文穆公設五科以教生徒國学更一也
吾門不可少其人也尚矣迺今治大隅
可留意教育隆也茅雁有日喜而叙之
文政二年春二月林鋭撰并書

よめもおのうへをみよ
おもふまゝかゝれ
自在まつおもひのまゝ
このほかもとめてもあまりたゝきこと
とゝきてつよはあまりもつおもふ
あまりひかへめもあまりよわきなり

文政二年四月　山本北海

蘇堂仁兄老丈

土佐日記考證

提要

そもくこれ日記を貫之のぬし延長八年土佐守乃任りあくあそこの國にくだくれしが任はてて兼平四年十二月廿一日あまたの人と京よりこのへなのがくれし旅の日記なるべし今の世乃人ハ日記やしいへを旅乃日記のさなるべきにはりふみそまどをかくハ日記とのみいへるおもるをそふかをもていへる名なるべし旅の日記をのみいへるおもひくに今りふ家くの記錄とのみをるくハ日記とのみいへるをもバ旅のり記をうけそいへんあを略次記あるハ旅日記家こゝをひとくさて家くの記錄といへるものをそ男乃志

萬葉集延長八年土佐の國よりくだりて
兼平五年京にのぼりて其のもとにあり
川よおハしまもにともよまれるまま
ひろ
うらさの花散つばきそらつしく
おもほゆるかも川のくま

名よ今のよさうの人きもれ何をとて世中
そるまさくあひくかたきの人のえある荘園のあるなり
こゝるまくよそをそるをもる
学ありきみそひくく等れ頭内よい役うれる
おなく等れおろうくかをそれ寛光

自筆本によりて家のもちひたる京極黄門自筆本ハ貫之乃
めでたき自筆の本をうつされしものとぞされバこの書に定家の
本としるされたる抄の本文にたがふ事なし

老人雑話云貫之自筆土佐日記
蓮華王院宝物也是を定家卿

うつしおける本連歌師玄的方にありし後ハ□家に納むといへり定家卿くハしく自己の筆法を以てうつし
ほかに三枚ハ貫之の書法をもうつしおかれしや文字の大さ字躰をもうつしおかるる跋にその趣をあらはし
おきたるよしいへり貫之自筆本ハ今亡びたりとなり
彼定家卿本ハ□家より□殿へまゐらせるとぞ

いまの板にゆるこの本と此本文ハ寛永廿年といふ年にいでし
風月宗智が刊行せる所の本にしたがひてそれこのみなしにも
ことなからずともおもひしかど附注あるハ抄などの本文にしたがひ
ふるきバかりにまされるをバ今ハこの本文にしたがへるもさるハ
古写本にもこの本もはやくからあれど写本乃本文に
したがひてさらにいふこそなかりしかバよろしきを人のうたがひ

この寛永本を後にあらためて萬治三
庚子初春吉祥日秋田屋平左衛門
板行とせし本ありたゞ奥書をあらため
たるのみにてこの本とかはることなし

あらんことをおそれてこのわたりこそながらもしとおもひしかど
印本なるをもてこれ寛永本となづけたるなり
この書に余が本によれる寛永本ハ寛永年間の本ハいくつもありといへるがごとく
和乃本にあらざれバまさしきことをもとむるによしなきものから
また本なりしかどさとあるき人のよみなまりしもあるかなれバ仮名乃
あやまりひがごとし文字に仮名を清濁せるなど漢字もいと
おほく漢字脱文衍字などもおほくなかりしかどまたくいはれなき
ことわりもあるハなほしひるハ文字をもとのへあらためたるも
ときもせざれどまた異本にのせたるてあらためるもなし
あるハ附注あるも抄にあるハ扶桑拾葉ある八群書類従などに
ある本をさがしてつきて校正をなしたるハ一つ二つをそへたりし

いへるごとく寫本のさにあるくあるべきことなり
をやくハへくると人ひとりてなる案
誤もありとおもふ所もあれどおのづからことなるあるべき
をものこのぶのハことのものあるくおさ
誤りをのぞき端の印本になりてなおしたるぜり
原本に文中は真名よこがきにする所をおかなれど初学の人の
ひがごとをもひく今かたかなを假名は直してくこれを
されど原本にしたがひなんもまくあるべくしかれバその真名
をバ本文のたよりをもとめたりを日記の古寫本おほくそ
真名をまじへかきるをのそきて定家卿本為家卿本
烏丸資慶卿本この三をもて假名かきたるまへをも又本文の右よ

つけくる真名ハ傍注とある是
ひらがなよりのまよいくるまで文のうん本はをさきをあれ
日記ばかりこのをとをさきなるべく古今集の
序ハ大井川の行幸和歌の序などもあれど古今集の
序ハそのまゝおそうげぐよことのなき案まて大井川の
行幸和歌の序ハそのまゝ序文の躰に
のこなりしくこのまゝおもこのよりく
文のかをもぐこのうん本あをものぐこの
日記もくを伊勢物語などをくべられそこの日記乃
うさざをいくこづくまえをぐをバさのぐおもあるべきこと
どもものくあるひえをバこころもものぐおよばざる

ぞくのあらひもいでくるぞこのころそこのほ花ぞと
給ふをとこもをなるほ記といふものを女もしらくえんと
とくをするなりやあるよりしらくおとるをうらうらへよりひて
こととぞのわめをなをやるをもてそこうら無としてはうれぬ
そはこのかよあげるをえくおりのべし
發端
をとこもをなる日記といふものを女もしてえんやうく
をするなりのう
十二月廿二日
ふなでのあるじどうもよもなむげを
同日
ふねのほとりあくあぶれひて來
同廿四日
ひとのぶをだよしぬのしぶあしそうでよみて
ぞあそぶ

同廿七日
おしぶよなれどこのひうこなどいふ
正月七日
あをうまを思へどこのひなしぶ波のしうそえる
同九日
海もそくれといはそしなぎぬ
同十六日
霜ぶみをおうぬくそといふれど波の中おいはそありる
同廿日
えうこしとこの國とはおとこそれるこのうれど月のうぶを
おなぶこ此なるべうれを
同廿一日
雲のうをよ秋のうれそしもられるあうめぞありる
同日
ううをのりるあうき波をよをそぶいふ
二月朔日
いその波八重ぶくおくよふく貝のいろはをうみく
同四日
女児のくえをうしうへよいてそのあをなぜもう

真名は直〳〵
らなるをもて假名
えらく假名なるう
たびくは原本の
いとゝべきハ後人のさかしら
京極黄門本奥書云文暦二年乙未五月十三日乙巳老病中雖眼如
皆不慮之外見紀氏自筆本 蓮華院寶藏本 料紙白紙不打無墨 高一尺一寸三分
計廣一尺七寸二分計紙也 廿六枚無軸 表紙續白紙一枚 端聊折返不立竹無軸 有外
題土佐日記 貫之筆 其書様和歌非列行定行書之聊有闕字歌下
無闕字而書後詞不堪感興自書寫之昨今二日終功

桑門明静

紀氏延長八年任土佐守在國載五年六年之由兼平四甲午五乙未歴
三百一年紙不朽損其字又鮮明也不讀得所々多只任本
書也有朱印

妙壽院本奥書云土佐日記以貫之自筆本 故將軍舊物希世之重寶也今度容々自小河
幕府借出之遂一覧依或人數奇深切書之古代之假字猶蝌蚪未悉臨
寫有魚魯乎後見輩察之而已明應壬子仲秋侯 亞槻藤原

諸抄論

土佐日記開書ハ著者の名をしるさゞるハ
元和寛永のころの人ハおほくハ世まねする
ものなりけりこゝもおよばざりしならんこゝろ一本を
ゆるくするといとまぢかく紀ぬしをそねまざるなりけり

そもくこの日記の注をたゞ季吟の抄ばかり世わたりとするもの
も附注とのみそのあることをバ志ざし給へいとくまれなり今この
二つ残あいせんるよ季吟の抄よいへることでもく書をひきたる
ことなどそのかたくく抄附注とこゝぢなるうわさハ記をかた
附注をとりくこゝけるものとそれおおやもしといそれしうくもえざる
もぞことなるもそれらまあげくる後をえても思ひ給へ
四月七日の条青馬抄をいへる所よ附注あを延喜式をもさ
するを抄あを公事根源をのこ記くる同日そくつゞくをうちてこと
もあを附注あを荘子をその書く抄あをおなじ
荘子ハひきたるとけける所よ文いくく本書よたがへるハあくぬ
書よりとりそえきくるぞ同十四日海邦のものをいへる条よ

附注あを淮南子文選書紀などをひろるを抄あハ太平記を
ひきけを同廿日日々をのぞんバ郡とうしといふ条よ附注あハ
晋書をひきたるを抄あを幼童傳とのこと楽まことに季吟
注印のひそに附注をそうとなくバ附注なりまさしるとハ
ありがべし附注よおのそざることもあるべくバそるを上よ
あげるごと抄ぬるごとハ附注ぐ条の書籍などの引あれ
あるくる季吟注印の附注をそくぐる證といふべし
土佐日記首書を著者名をくバをつ抄とたがふこと
なしさまでひきそうたがふ所もえめれどさそまぐくる
こゝあるもあくぐず
土佐日記注ハ契沖阿闍梨と縣居翁との後なりそ表原

宇万伎がしるせるものは皆県居の説にていさゝかもたがへることなく
しるせりとみゆれど契沖阿闍梨の説はそのまゝとりてのせたり
とおぼしくいへる所の説をもその書の標注にかゝげたり案
又一本県居翁の説を宇万伎がしるせる本に上田秋成が序
文をくはへたる所の説をもくはへたる本あり案秋成が説もすこし
とりつるをばさらにあげゝり

土佐日記打聞といふも県居翁の説を楫取魚彦がしるしつる所の
説をもくはへ抄の説をもそこらあまたくはへてしるせるなり
宇万伎がしるせるとおなじことなれどこのことにたがへる所もあり
さて按ずるに魚彦がしるせるは県居翁のはやくの説宇万伎が
しるせるは後の説なるべし　されど宇万伎がしるせるにもあれ

ことわりしる所の説をもとりてさへあげゝり

本傳

貫之ぬしの傳は古今集目録歌仙傳作者部類和歌色葉
集羅山先生文集大日本史等に出づ　されどことにいそぐることあれ
うれはまたこのたびのせぬるはことにはぶきなどしていづれをひき
てもことたらぬ所ありて古今集目録によれり

古今集目録云紀貫之延喜六年二月任越前權小掾御書所預　同
七年二月廿七日任内膳典膳与宮道潔興相替　同十年二月任小内記同
十三年四月任大内記同十七年正月七日叙従五位下同月任
加賀介同十八年二月任美濃介延長元年六月任大監物
同七年九月任右京亮同八年正月任土佐守天慶三年三月

屋主忍雄命武雄心命として二人とせるも誤
なりとは景行紀を考ふるに屋主忍男武雄
心命として一人とせり又古事記は武内宿祢
の祖比古布都押之信命の子とせりこの系圖
のごとくを八古事記も書紀ともに誤なるべし

任玄蕃頭同六年正月七日叙二従五位上一同八年三月任木工
権頭同九年卒

紀氏系圖云孝元帝――彦太忍信命――屋主忍雄命

武雄心命――武内宿祢（景行帝三年太紀甘岡誕生 仁徳五十五年薨）――木菟宿祢（仁徳同日生）――真鳥宿祢

大口臣――大人（大納言 天智五六三薨）――園益（従五位下）――諸人

麻呂（大納言 中務卿）――猿取（従五位上）――船守（正三位大納言式部卿 延暦十二三薨八十二）――梶長（正三位中納言 大同元十三薨六十三）

興道（下野守従四位上）――本道（筑前守）――望之――貫之

時文（従五位上 内蔵介）

女子（内侍）

大日本史巻二百廿云按古今集序註作文躬子未知孰是云々古

今集目録ゆゑ貫之の叔父祖をのせて歌仙傳ゆゑ先祖
未詳とあるにて著く思へばあるくより紀氏の父祖いつのひこうなぐぞ
とおぼしきさまを紀氏系圖よりとつまびらかのせてうちそよとう
せんのしことのはんさぐるこそ
いまこのく投合せ日紀ハはがちに世よいつまでに
投合しなまひしなめりと栗さる城はがちこのらぜあるを
さ紀よりまこのりなまひぬをまひぬをまぐこをとうつ
うバさまでりめくろうも志くぐりしどちに世つほのくまへ
ゆもおのれゆづもひとのごともなりあだしがち投合しむこつる
あこどる残ゆめなちくをこまこがやしごろあへもそうる
書どもをも志こといむまなどころねさせまくこるのよ

あそばんとおもひでそうしをもりしるふるえをもて乃ちを成こもめこ
めもめこの私〳〵ぞこれのろよのをぞなどのくまひしをもひいでこう
ばち〳〵よ別本などあるをもて文化六年とせといひそしてそのおばのりを案
筆をとりて今をでよ投ぶ一のきをひりぬされどもを七とを残
こもあるこれのそなづくそをぐ一みもあ一ばことみそどもをもんろ
つでごとよおさう投ぶひありくるおぐ九流もある投るを伊場至清山本
明清などでもる投ぶ一かとつく私れば到とものふあをさうものかりのり
ものいとまはのそし一つるまぐに一おを投ぶ一のおうび望きこもう考
こもぐもおるのつ私ぬ屋九れど投、のちおを志私えくく望我
おつきもるを文化十二年十一月七日　岸本由豆流

王充論衡效力篇云能上書日記者丈備也
老学庵筆記巻三云黄魯直有二日記謂之
家棄至宜州猶不輟者
宇津保物語蔵開上云とりのうつきう
でさつくりそつくれることゝもその人は日
記などなんとのみうよ仮名一
源氏物語繪合云ふるびいふ日記のこと
をもうつそさせうひて云
弁内侍日記云日記の古双子三帖大内裏
のころ中納言のまけ殿よりあづけさせ
まいらしと云
呂保叢歌令詞云日記ハ女もしもとき
るべなし一人よし
李時云男文字をもて日記を女文字
少そうくるのみなりとのみはあれどひごと
なるべし一云
今按ふこの仮をゝともやなることあるもの
字よなづくゝるは仮なり
源氏物が仮よなるとある注釈ゝ宣長云
するとハ漢文よりむくて吾物語などをなく
ひ土佐日記のごとくもの男もするよ日記と
文のをもしそうゝそうゝるべし」
錦織翁云れのごとくさざるもまで
るべくしかあめしていふことのみなり」
真淵云ひ日とひきゝをきを日ゝきゝて
いふ廿一日とひてきふ日ゝのほとゝみをかう」

土佐日記考證上

をゝことのをなる日記とゝのをもしてんくそ
するなりそれ兼平四年
月ゝいぬのはよ出門
こゝろみく
をゝこをなる日記とゝのをゝこをく日記とゝのハ根の日記のごとく
日ゝの事をあるせるをりそ日記とハへそ中ごろの家記といへるものごとしそハ
ゝ一のをもしそうゝそうゝるべし」
錦織翁云れのごとくさざるもまで女のうきよあ一びをゝ仮名
真淵云ひ日とひきゝをきを日ゝきゝて男のごとくにて女のうきよあ一びをゝ仮名
いふ廿一日とひてきふ日ゝのほとゝみをかう」
こゝろみく
ものひきやくこのれつる案ゝこの日記ハ趣意とゝのごし女う
ゝ一のをもしそうゝそうゝるべし」
真淵云ひ日とひきゝをきを日ゝきゝて男もゝハうゝをゝもゝ行ふゝこゝハ異本に
いふ廿一日とひてきふ日ゝのほとゝみをかう」

宣長云諸国の司人の其任國をさして縣
といふも古京より國ごとの御料の縣と官人
などのやどさふ心ごころの名目ぬのそれ〳〵
古今集のそこゝろをよ文屋康秀が参河
掾になりてあづまにくだりけるに
いひやりける土佐日記にあふ人あぐゝのこ
とをいつゝそこゝのつゝもあるも縣といふ任國
をさしてそこゝろもてるよ縣をこゝ田舎を
めうそうけるこゝろつゝハ非り」

續日本紀卷廿一云天平宝字二年冬十月甲子
勅云頃年國司交替皆以四年為限斯則適
足労民永可以化自今以後宜以六歳為限
三代實録卷卅八云元慶四年冬十月七日丁亥
制定親九年十二月格曰勤解由使起請偽去
延暦九年八月二十三日下諸國符偽凡國司交
替官符到後百二十日内付了歸京若違此條
留妨然令解又雖交替未得解由選任之
人不得居官無職之徒不許蓋察今諸國
所進不与前司解由之状依理不盡返却而
或國寄事辨申經年不進或國僅雖進
之理亦不盡因茲前司未免抑屈之愁後
司漸終四年之秩云

類聚三代格卷三云承和二年七月廿日太政官
謹奏諸國守介四年為歴事有謹愼選叙
今初任已上及二官遷代皆以六考為限慶
雲二年二月十六日改定四年六同二年十月十九日
更擬今文弘仁六年七月十七日擬慶雲格

天長元年八月廿日令介以上別處六年之秩
夫吏者民之所歸氏者吏之所本頃年良吏
之風希聞帝民之憂不息臣等以為善人
三年尚可勧殘四五九載難獲致功然則
治之能否非年遠近代之清濁賢愚不肖
伏望國司之歴用循慶雲二用四年云云
菅家文草卷五云扶四年盡忠節云云
百寮訓要抄云諸國の守むバ受領と申り
國司のくわんかり當時の守護人のごやー
當任八四年なりぬき國司むバ重任とく
くりて四年をふ又延任をて任をのべら
るゝもあり
日本紀畧云弘仁六年七月甲午諸國司遷
替以四年為限
續古今離別 紀貫之 吏法のもけやく
まくりなる海ぞれをゝそのある
つゝ
一日ごとにふバ為ゝさ思ひなどそ
ゝ〳〵ひとをいふべきぐゝん」

續日本紀卷十云天平五年四月辛丑制諸國
司等相代向京或替已未到以前上道或
雖交替許不解由類延六年三年告知
朝集使等已訖云云
日本紀竟宴歌
紀朝臣有世
阿弥波礼由安比古尓阿比天阿和支奈久
四年之間解由無之
なを解由のくわバ延喜式太政官式政事要略
卷五十六かゞよへバーくゝえゝう

をとこのをゝるとあるこゝろもまさりたらん 紀氏系圖 出河海抄 平安後
平仲日記 出仁和寺書目録 そもゝ〳〵の十二月九日
あるゝ第一日の日こゝろそれのそ〳〵ハ実ハ兼平四年かれどさゞふみもさだめ
めうそうけるこ

ある人ひゞくの縣
をもをへて解由などゝもそもゝ錦
のるゞこゝろ和へゝ附
ゞゝくゝくゝるゝ人ゝれこゝも
ゞゝくゝくゝるゝ人ゝれこゝも
ある人とハまへゝそれのそ〳〵なゞいへるゞとくこゞとゝうゝをゞめ
こゝろもにとこうくしをそ
うゝそいへるなり ある人とハ真淵の説ゝ班田の意とせゝれつゝをいふのゞ

真淵云解由ハ國司年ごの年貢などをうけとりてそこもる計帳を勘解由使にわたすまで勘解由の判官主典勘ごして目録をつくりて勘解由の長官次官にさゝげ長官次官直ゝに奏聞せしむるまでのこの勘解由使の解由状をとりてとゞめおくなるべし

新撰字鏡云餞 馬乃波奈 牟介

古今離別歌詞云さゝがにのくもの振舞かねてしるしもありてふ人の来るまつほどの云々

真淵云うまのはなむけはものくれなどするをいふなるべしさてむけてつかはすなればうまのはなむけのことゝもいへどなほ馬のことゝはきはめがたしさて馬ハ陸にあるものなればいづくまでもおくりゆくべきものなれどいづくまでとはかぎりがたきなり

書紀仁徳紀云有海人貢鮮魚之苞苴 献于菟道宮也太子令海人曰我非天皇乃返之令進難波大鷦鷯尊亦返以令献 菟道於是海人之苞苴鮭於俎邊

和名抄鱠介部云鮭野王按鮭 和名佐介 阿仁波 魚肉爛也

字鏡集云鮭 ガン

源氏花宴云々人うたふなるうまのはなむけのこゝもとにこそ

真淵云かれつゞれハ洲濱の音からわかれなどいふなるべし

廿二日 和名抄国郡部云尾張国 中島 海部 山田 葉栗 丹羽 春部 智多 愛智 知多 阿古居 十一郡

言実(トキガコ) 万葉巻十六云

醉過(ヨヒスギ)の宝壺こそ

鮭(アガス)あぐれわれにへそ

たひらのあそんの国まで

為家卿万葉附注本などにはこゝまでを一首とせれど誤なるべし今

もゝち土佐より

標注をゝるべし

廿三日 山の康教(ヤスノリ)

扶桑拾葉本羣書類従本などによりてなほせり

原本わかれわくるとあるは誤なるべし

守ごゝろ

馬のはなむけしてとゞめおくなるをんなのものそ

あまえるを暴してわらふ源氏なるべし

李時珍の五礼の字ことわりの説ハ誤れり

春海翁云わかれハ肉のわかるゝをいふ

つゞれハ同じことをおほくいふなるべしそよ

のもとゝとゝのへたるうまの塩のあるうまごもとゝにうけるうまの塩をいふなるべし

うまごもとゝにうけるうまの塩をいふなるべし

あぐれハ魚の肉ハ塩をふりてハあぐれバなるべし

新撰姓氏録巻七云山公内臣同祖味内宿祢之後也

同書巻十云山公垂仁天皇皇子五十日足彦別命之後也

同書巻十八云山直天御影命十一世孫山代根子之後也

同書巻二十云山直天穂日命十七世孫日古曽日乃名命之後也

同書巻三十云山首大明十一世孫尾張屋主都久代命之後也

万葉十六
塔栫熊来酒屋尓真奴良留奴和之佐須比立率而来奈麻之乎真奴良留奴和之

同十九長歌
荒風浪尓安波世受平久謹而可歇理麻世毛等能國家尓

釈日本紀巻十六云土俗古點クニト為避後嵯峨院御諱可讀ヒトーー世

真淵云御諱をさくるよしハ今上と太上天皇との二代のミなりけり続紀よりも代々の御諱をさくることあれど又他の國のさだめにハ始祖と五世の先の諱までをさけてその外ハさけざる定のさだめもあり皇朝もさハ用ひられしなり

続日本紀巻卅八云延暦四年五月丁酉詔臣子之礼必避君諱比者先帝名及朕之諱公私觸犯猶不忍聞自今以後宜並改避於是改姓白髪部為真髪部山部為山

類聚國史巻廿八云大同四年九月乙巳改伊豫国神野郡為新居郡以觸上諱也

続日本後紀巻二云天長十年七月癸巳天下諸國人民姓名及郡郷山川等号有觸諱者皆令改易之云云

あしび

山の康敷云山といふ氏ハ姓氏録に山公山直山首などみえたるハいづれの末なるらん父祖もあるべからず定家卿本為家卿本などに八木とありこれも姓氏録にみえたり　いひつたふるやもありけり云く八為家本附注本などよりそへつたへたるひとやもありけりとあるぞいしとも此もののごとくそハ義つもびしらなけれどいてハゐての假字にたがへるあらく率てゆくなどのよゐてとおもへど謬なり　かとがら者やあらんところ紀氏よりも謙退のことぞとてハ國司のおしきゆゑにやあらん今任限をそ京にのぼる時ハすべての人ハ薄情なれバ今ハとてそらまのものむけをもえざるをもある人ハさる薄情なるものをもちぞてさへひさくるよしなれ意なり　それをさるんきたるところをかくあれど誤字あるべしこの事にまくることもこえがたしある説に恥過とみえたる説あり又身のいやしきをもぞとみえ

諱を避るよしハ顔氏家訓風操篇容齋随筆陔餘叢考巻卅一などにもそのよしあまたあれどもとむなれバここにハ略せり
真淵云ところのとかハその他の名殊さらにいはずひろくいふ國のことなり」

たる説もあれどいづれもおぼつかなければ異本によりてさるんきたるとひろむべてこともあきらかなれどもただ一本にのみよりてわろくせむべくもあらねバしばらくおきつ八猶考ふべし　國人のならハしとして云く李岑注作統は國人ハらむところの事たし後嵯峨院の御諱を國にとふせしよし儒書あるくもなきことのみならずとあらしき文字のままよみひとくよむべきとぞ釈日本紀に後嵯峨院の御諱をさけられて土俗をひとつのよみあるよりおほど釈日本紀の作者卜部懐賢ハ後嵯峨院後深草院の御時の人なりしかバさけられたるを今の世までの例とするやうならるべしあるもいふべきより御諱をさけられて文字をかへたるなどとさる標注に證をあげるがごとくなれど文字をもそのまま用ひ訓をかへたるなどハあれどせ又漢土ひとをそなどく文字の書をもちぞさけたる文字をかへたるを文字の音のみをかへたるをさけたる猶考ふべき標注をなむてさるべし

うれいうのようでわ
人をそそ
延喜玄蕃式云凡諸國講師擇年四五
已上讀師四十已之者補之
又云凡延暦寺三綱一代之後任諸国講
讀師其上座寺主任講師都維那任
讀師
政事要略巻五十五云延暦十四年八月十三日
符尓右大臣宣奉勅如聞諸國師任限
六年兼預他事煩以解由自今以後宣改
國師曰講師每國置二人」
源氏ゑあふひ大将さうぢさまへ
うくうぢひしれてをるうかつきいや
やせくかう云々
万葉九長歌
世間之愚人之吾妹兒乎告而語久云云
竹取物語云あれしたうハでうらう
あれよあれてよく
木朝文粋巻一源順歌云不足言不足朝
恥白狀之人肖雲
左傳成公十八年云周子有兄而無慧不
能辭以敗憂故不可立　杜預註云不慧無
世所謂白癡」

延喜玄蕃式云凡諸國講師擇年四五
已上讀師四十已之者補之
又云凡延暦寺三綱一代之後任諸国講
讀師其上座寺主任講師都維那任
讀師
政事要略巻五十五云延暦十四年八月十三日
符尓右大臣宣奉勅如聞諸國師任限
六年兼預他事煩以解由自今以後宣改
國師曰講師每國置二人」
源氏ゑあふひ大将さうぢさまへ
うくうぢひしれてをるうかつきいや
やせくかう云々
万葉九長歌
世間之愚人之吾妹兒乎告而語久云云
竹取物語云あれしたうハでうらう
あれよあれてよく
木朝文粋巻一源順歌云不足言不足朝
恥白狀之人肖雲
左傳成公十八年云周子有兄而無慧不
能辭以敗憂故不可立　杜預註云不慧無
世所謂白癡」

宇津保國譲中云さうバまうていろよ
うれうくあるようれうくさあるうくまれ
うくゆうんうく
十訓抄下云修しあなづらはしくぐ
しおかあ」

文字ハらの誤りをそのうくがとして注をバぐぐ
されぬさまざまと諸本ともあり真淵云ゑゑ
もつ又考あるよふにあれふしあれふしそなどいふ文字と同じくて助字かも
やあうん助字のし文字ぬ下ハうなうびそこうる歌うにいへる説あれど
うるうびさあもうぐぐうぐぐそこう標注の考證をそあるべし
一文字をぐよしうぬりのしがひを十文字よあうそでありをみうくこハ例の
をうあれうるあそ辨あれうくあしうをもうぐまうびをうあるをいふ
今いふ千鳥あしなどいうよおなし

和名抄居處部云館唐韻云館官舍
作舘和名多知
釈日本紀巻十三云高城館私記曰紫恠名
日本紀作高麗
麗乃多知」

廿云々守孫たち綿ようのよびよふうて文そうくまうの
ようぐれくいくて為ひとは英ゑやう夜ここのうとうを附
あそぶやうあくはよろり

書紀神代紀云乗設饌百机以盡主人之礼云云
後撰夏端詞云ゆかハれどさそはぬ
ろれバくらゐをもとゝひてあるしいそなどたゞあれどもれバ云
伊勢物語云左中弁藤原のさねとをといふをなんもらうどにしてねやそきの日をあるじまうけしてもてなすと云く
蜻蛉日記云ものゝ琵琶の琴よりはよきなどつけあるハ衣裳をもとめ給へバかゝるすゞろごとをもいふなりと云く
大和物語云大弐まもりのぶけ忠峯もろくまうけなどしてもてなすと云く
季吟云纏頭つけものと琵琶の琴よりはよきなどつけあるハ衣裳をもとめ給へバかゝるすゞろごとをもいふなりと云く
古今序云もろ〳〵のうたあつめたまふ
季吟云あまたさゝにいひてまろうどを吹まよはすハ紀氏の自記なれバおや文章官をたつとふなどゝかや侍〳〵ん」

守のやかたに新任の土佐守の館をいみさそこそうと紀氏をうびよおこせしなり

廿六日なほ守の館（よあるま為　饗イナシ）おもく（そあるまゝ宜）あるじ（郎等　まろよ為門堂）をのこなまろやまやもいとゞ（宜ナシ）いひあへもてなし（詩）こゝろあげていひ（主人）ふるまひ（客人）もまろうどもことゝくをいふなりとゝ従者までといへるなり　詩を声なあげくうたふもこゝろとハ詩をいひやまとうたふもの〳〵ことゝもおもしろきなり

今日もなほ昨日のごとく今の土佐守が館よあわとなり　あるじハ饗おもくもてなし　餞をするをいふをまでよゝめづけうりやもろ〳〵ことゝくをいふなり

詞しるせるをバ人ごとにいひてまろうどをもてなすをいふなり

あまたの餞とうげうの書万葉にも見えたり

古今春上
ふるさとの梅のむめゞにさせるあろ〳〵の花ぞむかしの香ににほひける　つらゆき

新勅撰春上
あろ〳〵とのはるかすみたちこめたるの花ぞくもゐにほひくまなくうつろふ　家隆

古事記は仮名序に賢をもて訓とし書紀は賢人賢書賢良明於君子などをもて訓とせりと云く

古今序に月日をあらそふ事なきにたとれるなどをもてさうざうしくもろ〳〵めづらしくもろ〳〵なりとも侍〳〵ん」

さてあるじハ新任の土佐守まろうどハ紀氏をうびかゝるをもてなすをいふなり

ふるさとの梅（越定群）

郡いでて

さるまの（枕草子）

志らゝとの泥障をこわくゆきこのくいてまの栗（群ナシ）

みぐさハこれなるべしとのくいてまの守も（さるまのもの栗のも為門）

さのしなもなるべしとのくいてまの守も（群ナシ）

今のもゝとゝもおわくく今のあるじもあるじ（詳言）

なるもの〳〵くゑびごとゝよゝめづなることにして

いでよ（いざ群）
　和いでゝ云くこの今ハ新任の土佐守のあるもろ〳〵ハ都をいでゝう君よ
あらんとおびてこそさわぐらめこゝろぐるしくもあるかなとなり　うるわの守ありといふ云々ハ紀氏ぞうりて
もろ〳〵ことよとなり　うるわの守ありといふ云々ハ紀氏ぞうりて
女なれどこの日記をゝて女よ詐してこゝろれつゝバるぞとこゝろあや
人のあやうがいへるなり　もろ〳〵の云々ハ此の紀氏のうゝなり万葉
土佐友をいざこゝのひとゝめもろ〳〵のごとく遠き海路をゆくさ
うゝくうゝきやまあゝ人もあやもわゝどゝあれを又これに悠く
君やもうゝき波路をゝておりゝくりとなり　さうしハ古事記書紀なども
貧の子をゝれどゝの意なるべしろハ衣のさをいふをゝ
もとゝよおりて云く真淵云この舘をいづるよりあをうみも晴よりあり

和名抄第九土佐國長岡郡大角郷（訓阿保）
真淵云浦戸ハ大湖と入海とをつゞけてさしおほる所と大津より南へ二里ばかり今の府より三里むかひそこをさしてまづいでゝそ大津よりをのつぎの鹿子の湾ありのぞくらいをぞハ旅ぐちの設なりいそぎをゝれどくいふハ女のさまなりそとゝふハうつゝおろこびの事にあれうれゝとあるをいふなり」
宇治拾遺第十三云いまハむ〳〵貫之ガ土佐守になりてくだりけるに任なりてのとしハてのみおれもいでゝうげなるをこうぎうなくをゝおやるをこうくるぐ〳〵ひてうせまゐりなきまゝにひやまひつくりてうちふせりけるがうゝにハ月ごろよりなりぬればいとくてあるべきことゝうハのわりなんとやおもひけるそのよなかばかりにやありけんいとおもしろくあかりてありけるをうちながめてうちおもひつゞけてうちふせりけるうちに

　やよもの
　　うみとやいはむ
　　そらとやいはむ
　　ゆくもかへるも
　　わかれてハ
　　なみたもそこも
　　しらくもの
　　たえまにみゆる
　　おきつしまもり

おくるゝ友なかりけるあひだにかゝるうたをなんよみたりけるとぞ
でのことゝぞなどいひつゝをいふなるべし

廿七日大津より浦戸をさしてこぎいづ（こぐ定ナレ）
うちよりあくるまでかゝる案浦戸をさしてこぎいづ（こぐ定ナレ）
おくうぞこのころ（出立）
ごともえいそぐ（えいそれぞイ）
このなぎ（いそぐ定群）
ひる人のこゝろ（性）
　宇治拾遺第十
　　ふねをなりくだる
あをとをなりくだる
大津浦戸なる土佐國の地名なり　うゝて俄にうせ（ゝバ）ゝこハ土佐國

春海翁云おこむあをいふおハあくびんさーあるあらにいひなもろ」和名抄龍魚類云鏡唐韻云鏡（禅色立成云仁部一云）魚名也物類称呼云いもち京江戸ともにいもちと云ふ西國四國おそらとよ

真淵云今ちあさハ口綱おそ今の俗語に口おもーといふごとく口よおそうそうといふ名なれどもちおそごびまたもけおそくーてうえをーるなり諸持といふありおひ如せるといふ

宣長云金原清方がとく今世よ海人のあるぐさま引綱といふそれは口綱與綱とおるをその口綱ハひろさ六七尺斗長さ八五六十丈もあるを海中へ入おきて魚をとるをひきあぐるゆよ海人ぐるこらなきちてあなひぐさそれおんといつさもあるべーまのおむことロ重きをたおれなかの口綱のおもくてこらの人のくうてゆおひぐをにたとへいひくうんといふ云此説五勝間よおそう

上田秋成云綱よハロとおひてうちひろごるおをいふ我雅波の浦人の今もあうおそれどロ綱と名よふおをそこそえをぢ」

真淵云をーとおふ云ふの約ハこれを惜そふといふよ鴛をえて鴛とおそう芦

（定ナシ）おをいそれわのめくこうくるれがくくいいてこうれ人そのくるもあるもちおくこのうえべおくみなひいざ（も走）

せうるくー」

をーと思ふんやとるるをあーごも（葦 鴨）のうちむま）

てこそるれハまよふれといいて ひの葉れバいとめくくめぐゆくん人のうえ（附ナシ）

さををせどそ（け為）ん（ぢーんイ）をまよるこのれといみあひぐまのどもをのあハまおのれー海をくひつれバもぬくらぬ風もゆるぬべーとさるげた

鴨とおひてうちおれてこふべき料ー

春海翁云この翁ハ惜よ鴛とおひをうるおちあくび

万葉十一 葦鴨之多集池水雖溢 諸溝方尓吾 将越八方

古今恋一 ありものさとく入江のあうかなめ あーずやく人をうくこひんとも」

真淵云そこひハそこきうとおふをの詞なり水のをのとよきうれ万葉よありつうのをそひのうらよ又野のそき山のそをそこいるもう報をてうきうのうまよりを統のをそひのうーハを統のそうきうのうーんをそこいこひの約なれハをそこをそこひ同語なり

古今恋四 素性法師

そこひなきこふちやハさそぐ山川のあさくせめそをあくまハるそ

後撰春下 三条右大臣

こうきうおさ春よおふ春のおれおれバをこひしもあーふおをこのふうをう

紫式部日記云ちひさきこうあをれ悩のうちよう行されバあもあさよいとびきれいろありひのをそひもあーぞきまーなるるる

源氏玉鬘云人のくちハおられくるもおれをそひあるうのをととそえ」標注よあげて諸説をえくんのひえんうこにそさ

あるうのとえく開書云この翁ハろハなき人をなくありたりといふことをさへもなけよのあまりよう与もれくくもれバづくふおるそとひなどおるこをおるおもむをおり有無をきへうをそこ斗なげさにあづくるるまをうもあれなり　鹿児の崎ハ薩後のつぎさて考ふるよ土佐の国おうちおるまあきうけーさるを附注よ書紀應神紀の鹿子水門とあるをひきたるも甚ー紀誤なる案又名所よかこの海のかこの渡うこの辞かこの川などあれどいづれも當國よあらべ　守のもう云ハ新任の土佐守の兄弟なり　人々の口あるもおろもちおそこの海べそのなひひおせる翁ニここハ例のこふおれうけるおそ人々の口ろくくともえいひいでぬ口おりきをうちあれおおなたへていへりさてうちあをおうぐと」

李吟云李白ヵ汪倫にあたふる詩に
桃花潭水深千尺不及汪倫送我情
よくかなへり」
真淵云李吟説にうくつと八海の字をよめりとあるハいと誤なることハ海を渡るといふ事より則ちことひて海の名とせり山をこえてゆく國を越の国と云ごとくつハ天つくに國つ神などのごとく助辞にみなもちの約ゆく則海つ持わたく海をわたるもちてまふ神などの古事記にみえて明らかなるを持じて只海のうちゆきふてハ海のうち」
李吟云ものれしといふハ助字にこの詞いせ物語にかぎりなくとほくもきたるかれとのびあへるに渡守ちや舟にのる日もくれぬといふに似たり」

古今大歌所　甲斐哥
かひがねをさやにもみしかけれなく
よこほりふせるさやの中山
かひがねを祢こしにみじくかぜを
人にもかもやことづけやらん

がくし中んにに考ふるにちあこハ魚の名にて鮠をとる網なるに人くの口を鮠網にあせくいへるなるべし　鮠ハ今いふいしもちの類なりむハくハしく標注にあげたりところもちハよろしきにもちあふをいへりを鮠網を口網にあせ網といふより海邊ともいひあなひとをともいへり　をしと云ふ人やいかなるにをあしがもの云くかうがもハうちむれてといへん序なり鴨のさかひなへて群とぶそのなれバなり　古く人の云くこハ乗り行人のと文字につきてなびらとく訓ぜりさるけありしかどこんしにしかしら今ハ諸本にゆく人とあるにちがへり　されどさせどもく紀氏ふつくらゆかしくとことひちかれぬハちかくかぎりもちよばといはんがごとしさてこの哥を君がふさんを今こそとへこれといへんとて上の句ハ序におけるこの哥序歌といふべし
こう読をせるにある人くもうかしくにつけくくこのしら哥

李吟云この甲斐哥のきじあるは哥ハこれハかゝるのハなんすおいそぐまでく別れきをりよ哥もなくといへんあさまなちの哥ハをおくりきさる人をゆく紀の人哥か京にあふ人いまだもわかぬをりや擢たりの風をあそらぬべしといひさきはをもあやとくやるがなことづてといひやらんといひそへろふさへる形べし甲斐ハ東國なれバ西國なれどもけるに
和名抄船部云艖艫唐韻云艖艫 和名布奈夜加太 舟上屋也
蜻蛉日記云ささぐらのたりし舟子どもやからを引てまうけたり云こ」
藝文類聚卷四十三引劉向別録云有麗人歌賦漢興以來善雅歌者魯人虞公發聲清哀蓋動梁塵」
列子湯問篇云薛譚学謳於秦青未窮青之技自謂盡之遂辭歸秦青弗止餞於郊衢撫節悲歌声振林木響遏行雲薛譚乃謝求反終身不敢言歸」

ども舟に出づこのかしこをいふ又ある人わしぐよたのれど
このハしこしくみおもかしハこのうへうこかへきあかゝ色うくしうちかりも
ちらもそうしけく雲もあまぐよひぬとぞいふなるこくよび
浦戸よとまる　藤原の言実橋の李衡あとくくく
あひて雲

をりふしにあらハしきをききこハ哥のさうに似合しき餞別の詩なりこなひなる古詩などいへるなるべし　うた哥のハ甲斐哥のかり古今にあさり標注をみるべしこゝにもとさらに甲斐哥をうたふハ李吟の説のごとしこれも標注をみてあるべし　このくらふにあなかゞかくらをちりもちるをもしくめくすとももただにひぬとぞいふなるこくこハうの体そら風のふきく塵などのたちしを哥にことにあせくあるへのいへりしなるべし

あなやさこのちりもちりとも漢の虞公が故事なるべし〳〵もくもく

らひぬとも列子に出でたる秦青が故事なるべし〳〵とともに標注よあげる

をゐくあるべし〳〵 孫承言寶八上の廿二日の事なり 人なり 橘季衡

なるも土佐の國人なるべし〳〵 父祖あるべうぞ

廿八日こ〳〵ゟ戸うるまこぐぎ出でく大こ湊とをおよこぎ

あひづよくもやくの守 今の守 群 之間

どのそそろろもやうの山口の千峯酒なさものの

大湊が前後のつぎもいまこりゆくくのこらふ

けし 大こをおこぎこハ聞書よ風よ舟をおハまる之舟の縁語なり

なりことにへるがごと〳〵抄よおとハ追〳〵ゆくこうろとある八誤なり

くくの守なる云ことハ紀氏ゟり以前の土佐守のまなるべし 山口千峯

土佐之廿一

職員令云ル國博士醫師國別各一人云〻

古今春上 賢之

春ゐ北のゐゟなるこゐ〳〵ろさへの

そそふりとへごとのやくうそ

大和物語云ゐるんをおそろきされ

とゐがむつまじきおさもなし〳〵

宇津保俊蔭云ゐくありもべうまへるよ

いうぞう おんくそ〳〵ぞろ云〻 白散歳且以温酒服方寸匕一歳有験

延喜典藥式云白散一剤 治悪氣温

則一生無病帯屠蘇一剤 屠蘇酒治悪氣温

最宜合家飲用 屠蘇一剤 屠蘇酒治悪氣温

又云毎年十二月造合白朴白散四百十五剤令

醫師修生長帳并書標題云〻

前漢成時記云正月一日長幼悉正衣冠以次

拜賀進椒柏酒飲桃湯進屠蘇酒膠牙

餳云〻

宋齋清異録卷三云今人元日飲屠蘇酒自小者

起相傳已久云〻

熙朝樂事云十二月醫人亦送屠蘇袋

同心結及諸品湯劑於常所往來者云

この外千金方本草等ゟ屠蘇のゐゟ

ゟれどおゐれハゝなひるど」

父祖つまびゐうなるべし〳〵

廿九日大湊よりうまあるこゐ〳〵 醫師

白散酒 ムハへくく 屠蘇

廿九日今日ハ十二月のつごりなれハ醫師の屠蘇白散などゐそ

きゐるさそ日本長暦をゐて考ゐるこゐ〳〵ハ兼平四年なり是ごだ

十二月小の月なり 今年ハ土佐國の醫師なるべしふるくくのゐ醫師

ハ講師讀師ごとく國ごとに一人をおのれしをハ標注をゐそゐる

べし 屠蘇白散ハいづまも正月元日ゟ用ゐる藥酒なること今の世も

おゐごこハ標注よくく證を出せり標注よあげくるおあも西宮抄

北山抄江次第ゟくくをゐ礼儀類典などゐるくハしくゐえられど

尚書云月正元日孔傳云月正正月元日
上日也
玉燭寶典巻一云正月爲端月其一日爲元日
云云」
延喜大膳式云正月最勝王經齋會供
養料芋六合滑海藻二両二分云云」
西宮記巻一云内膳供御歯固大根瓜串
刺押鮎焼鳥等有進物所云云
源氏初音云こゝにむれゐつゝはがため
のいはひしてもちゐかゞみをさへとり
よせて云々
河海抄巻十云歯固事見掌中暦六本
爲ニ前云云内膳自青璅門供御歯固
具盛青瓷大根一坏瓜串二坏押鮎
煮鮎猪宍以鳥代之鹿宍一坏以鳥代之長和三年
正月二日餅鏡御覧是其例也云云
久安七年正月一日台記云早朝参禪閤御
前次参高陽院御方次歯固手水如常云云
兵範記云保元三年正月一日右大臣殿召
御薬東入御有御歯固事女房被供之云云
世諺問答云問同日歯固といひてもちゐを
まゐらするハいかなることぞや人ハ歯を
もてよはひとするゆゑに歯といふ文字ハ
よはひとよめりさればよはひをかたく
むすぶこゝろなりもちゐハ近江國の火きり
のもちゐとてもちゆべきことゝあり

元日なほおなじとまりなり白散をあるものの夜の
まとて舟やかたにさしはさめりければ風にふき
ならさせて海にいれてえのまずなりぬ芋茎荒布も
はがためもなしかやうのものなきくになりもと
めしもおかずたゞおしあゆのくちをのみぞすふこの
すふ人々のくちをおしあゆもし思ふやうあらむ
やけふはみやこのみぞ思ひやらるゝこへのかどの
しりくべ縄のなよしのかしらひゝらぎら
いかにぞとぞいひあへる

元日ハ承平五年正月元日なり元日の事標注にくはしく今ハ
屠蘇白散をあつかへる事ハ大湊にありしとなり　白散をわきまへ自に

延喜主計式上云火乾年魚押年魚煮乾
年魚云云
同書内膳式云土佐國押年魚一千斐云云
江家次第巻一云元日御鮎一坏煮塩鮎
一坏云云
拾遺物名　おしあゆ
ちとりのおきゐるまゝにせつとくる
おしあゆのそれねぬ（よ）とゝくべく
賀茂保憲女集云かしらしあきおきされ
あんなもがくめとおりきよぞおひそぐ
めてあゆのくちをとうつりきうけの
うるげぬもちひのかゞみとして云く
上田秋成云押鮎ハ今の干鮎のたぐひなるべし又
製するものもあるべしいづれにも
喰ふときいきの爲人くの口つきとなく
なりゆけなるを見るにもその容乃
あやしげなるなんをなうけて物ハなを
べくあるをと用ゐこのおもしろき
うくさざまに

楚辭九辯云君之門以九重　補注云天子有九門謂關門遠
郊門近郊門城門皐門庫門雉門應門路門也
駱賓王詩集云山河千里國城闕九重門」
古事記上云卽布刀玉命以尻久米縄控
度其御後方云云
日本紀纂疏云端出之縄註云左縄端出此
釈其義又解其訓也縄者直之義神道

のまんとてある人のしろきにかへてある物のあつかひなどゝさしはさ
みおきたりしを風にふきなくさせて海にいれてのまずなりぬと
なり　ふきならさせてハ附注本にふきならさせてとあり又異
本にふきならさせてとあり興本にはこのまゝのごとく
させてとあるハとくとくにあやまりなるべし聞書中にもふきならさせ
風にふきならせてなりとあれど詳らかならず　いもあらめ隆今も正月
元日に用ゐるものなれどもこれハ原本と資慶卿本とに坂田めとあれど定家卿本
爲家卿本諸本などにハあらめとありて坂田めとあるハこの爲家本と附注と
のみにてハあらめとありしを文字の似たるよりまぎれたると写し誤り
しを文字に直してうけとりしなるべしされバ今ハ諸本によりてあらめ
となすべしハ歯固にて標注にいへり又考ふるに坂田めの坂田ハ地名なりなん

以直為宗左者陽徳取清明之義端出者
綯索而不整雲其所餘之若端也是質朴而
不飾之意故以直清質為神明之三徳一條
縄而比三徳也界者分殊淨之義即今世注
連是也云云
世諺問答云あめ縄とい少狗ハ左縄よりて
縄のこゝろをとゝろへぬ物之左ハ注連なる
いふれなり扨をとゝろへぬハをろかなる
ものゝたとへにあまそるおろん神代天の岩戸を
ひらきたまひし時あまつ縄とそひろれるハ
今のあめ縄なり云々
真淵云あまつ縄ハ書紀なる左縄端出とも
端出之縄とよめり和名抄なる注連之利久反倍奈波反日本
紀私記云端出之縄讀曰注連同
とあるこゝろなるべし
宣長云あまつ縄なども今いふあめ縄をつゞむ
れバなるべし
なり尾ハ葉のかをひろあつまれるをいふ
あまつをとゝろへぬ物なりとあるハ
荊楚歳時記云正月祈蚕麻戸上懸華
索於其上云云
書紀神代紀一書云ロ女自ロ出御以幸湯ロ
女即鰐魚也
和名抄鱗介部云鰐孫愐切韻云鰐魚
名也鰐一名鮫

讃岐國香川郡坂田とふ地名あり延喜式などよ讃岐の國より海藻を貢
しものゝ見えたれバ坂田めハ讃岐國香川郡坂田のうらぐせ〳〵海藻なやあらん
さてこの説ハさることゝおもへるのこゝろなれどなほあめつ縄
のこゝろとハいへるものにあらず
うへよりの条さる用意しそとあもおもふぞよき
あれど猶なほおしあめとし下の文やおしあめとあれバ今ハ諸本と下の文
とあるにしたがふべし
なほ〳〵元日よおしあめを用ふるより標注をとゝむべし
かどの左右なるとあるとゝ諸かと止の文とよりてあるこゝろ李吟云
小家とありしをもて知ぬ
鄙分あるゆゑのこゝろなるべし
なほ〳〵ら初ぎなどよびもてるより又考ふ

土佐上廿五

本草和名云鰐似鰐而大頭　和名奈与之
字鏡集云鰐ナヨシ
盪嚢抄巻三云聞鼻ト云鬼人ヲ喰ントスルヲバ鰐ノ交車ト名付ケ家ノ門ニ指ベシ然ラバ鬼入ヲ不可取ト云御示現也ト云
四季物語云つねなの祝ハ鰐のごとしなきをいひらぎのをとハなにらよ家まハ百歳なりともあるべきことなれバ大内ハうりの司よ例としてつかうまつりの時ハ
續日本紀巻二云大寶二年正月丙子造宮職献柱名樹長八尋　古日ハ良木
新撰字鏡云巴戟天　此ハ長木也谷樹同上
以ヲ波字類抄云貴木ヒラキ」

真淵云まつ中も馬のそなむけ〳〵る講師ありしの例ハさるべくの物語なども
なり」

二日なほ大そうなるまよこゝろの縄を
おこせ〳〵集

節分ハ去年の十二月廿五日なり

新司附

講師を異本にこゝろ〳〵と假名よりけるよつてゝ公事物とりそろる説
あるど誤なるべき事ノ論なし　　の酒かこせこゝろ〳〵ここハそのあれと
さてゝなるそよあぢめ〳〵ていへる詞なり
三　なおなし〳〵ど　　こゝろてなに染りてこの世波のなわしハと定
をし〳〵むやあ〳〵んこゝろのもと物
見聞抄云うらぐもる　　日うら〳〵ぬハり風や波のうれ枝をこ
らぐもるみやと学ぶ
ぼなうぜてあバえいでゝもぞまさつ〳〵酒よこゝろをれ
たいまつる定ナシ　　このゝうめう乃物もてるくなる定
もえあ〳〵でこゝろぜいこゝろぜこゝろぜ定為　　物もなし〳〵あぢ
つ〳〵しこゝろ曲妙　　なるもしどまさるこゝろを

土佐上廿四

かしてその言ばつゝくなるあり必しもなるかのかーあよおれ下」
伊勢物語云ひつゝくうれるうまさもまさ
真淵云ぢとぶせおバまさるこゝろをあり」

まさつ〳〵ハ父祖あぐらゝ妙壽院本ま吾連と文字まてきこゝろ　なり
〳〵もえあ〳〵でこゝ事吟去伊勢物語ま　なおやハあるべきこと侍るま同下く直ろ
字なるをし〳〵でおもえあ〳〵どとのゝ注標注をこゝてあゝ〳〵　いさけこゝぢ
なゝ〳〵物とあ〳〵こゝハ承ないさけこゝをせこゝを物もなしとあれど誤なる
るあり〳〵なをバ扶桑拾葉本群書類従本にこりてあ〳〵むその御ぬ
をハこの本こゝるへくまたおハあ〳〵ていさこゝるもそあ〳〵をもはんとゝみ
ま紀事あれバこゝぢ〳〵しきまあれどもものさこゝる
人をまこのこゝぢまるこゝろぢと
おなこのせなくこゝ　　る資枕
もこえバとゝ　　やまおぜ　　おれ下ぜこゝろまひめ人く
おなじこゝろまあり〳〵こゝハ多本におなしとあるとゝもど今ハ諸本ま

よりてあくらむ

六日きのふのごとし

今日もきのふの如く風波やまねバ同じ泊にあるとなり

七日になりぬおなじみなとにありけふハあを(青)うま(馬)を

おもへどかひなしたゞ波のしろきのみぞみゆるかゝるあひだに

ひとの家のいけとなある所より鯉ハなくて

ふなよりはじめて川のも海のもことものどもながひつ

になひつゞけておこせたり

わかなぞけふをバしらせたるうたありそのうた

あさぢふの野べにしあれバ水もなきいけにつみ

つるわかななりけりいとをかしかしこのいけといふハ

万葉第廿云天平宝字二年正月為七日侍
宴大伴宿祢家持作歌
水鳥乃可毛能羽能伊呂乃青馬乎家布
美流比等波可藝利奈之等伊布
水鏡云弘仁二年正月七日はじめて青馬を
ひかれき
内裏式云正月七日左右馬寮各牽青馬
入自延明門
延喜式左馬寮云凡青馬二十疋自十二月一日
至正月七日二寮半分飼之
河海抄巻五引十節録云正月七日看青馬
青以白為本天有白龍地有白馬是日見
白馬即年中邪氣遠去不来也
兼盛集
ふるゆきにいろもかはらでひくものを
たがあをうまと名づけそめけん
公事根源云礼記に春を東郊にむかへて
青馬七疋を用ゐるとあり七ハ少陽の数也
月ハ少陽の月なりと云々
逸周書巻七王会解云周公旦主東方

所之青馬黒鬣謂之母兒
真淵云青馬といへど実ハ白馬なり古言に
白きを青といへる例青雲の白肩之津と
いひ青旗といへるも全くハ白き旗なり万葉
の家持の哥にハ水鳥の鴨の羽の色の青馬をと
よめれど
和名抄本器類云櫃和名比都俗有長櫃韓櫃折櫃小櫃等之名
以木向上開闔器也
撰壤集云長櫃ナガヒツ
伊勢物語云なか月ばかりに梅のつくり枝に
きじを付てたてまつるとて云々
増鏡巻六云雉と云小鳥を萩の枝に
つけたり云々
鳥を草木の枝につくる事ハ河海抄又ハ
武家調味記などにくはしくみえたれど
枝につくる図をものせたりしきちえてある
べし

所の名なりよき人の男につきてくだりて住けるなり

なりこの長櫃の物ハみな人わらはまでにくれたれバ

あきみちてふなこどもハはらつゞみをうちて海を

さへおどろかして波たてつべしかくてこのあひだに

事おほかり

七日今日も猶大みなとにありとなり季吟云この詞大みなとに久しく有て労倦の心あらハれ侍り　あをうまのことハ標注にくハし　人の家のいけとなある所より云々いけハ土佐国の地名なるべしいけといふ所の人の家なりとこゝろうべし人の家の池と云々とあるを異本に人の家の池のとあるによりてかんがへて意ハいけといふ名ある所なれども池にある鯉ハなくて川の物海の物などおこせしと例のたはぶれたるなり

鯉ハなくて云々ある本に鮎ハなく

太神宮儀式帳云正月七日新菜御羹奉作奉
大神宮并院祭宮供奉々
大神宮儀式解巻廿二引年中行事云正月七日
新菜御饌供云々卯刻也云云
菅家文草巻六云平安音聞于故老白上陽
子日野遊歌先其事如何其義如何侍私
擬以摩挲習風霜之難犯也和菜羹美而
堪口斟氣味之克調也云云
公事根源云供若菜肉膳寮なりよび
内膳司より正月立の子日より始まることありや云々
寛平年中より始まることありや云々
刑部式蔵時記云正月七日為人日以七種菜
為羹
西湖志餘巻廿云立春挙酒則嚼切粉皮
雜以七種生菜供挙筵開盖古人辛盤之
遺焉耳
真淵云七種の若菜のうちとくさまざまあるよひ〳〵に枕草子などなをそのうをひてつゞりなれあまたゝび〳〵なれバなをそれが菜もたりをといへり七種の名さへもあやしバかりをうるおぼえなきにもあらねどいとくるしくつゝあるおなう」
宇津保物語菊の宴云々をれたるおとこ廿人ばかりうち四人さゝらをうちとりてうたふ
[illegible]

荘子 以此篇云々補音氏之時民居于知所為行不知所之含哺而熙鼓腹而遊民能已此矣云云
史記范雎傳云伍子胥橐載而出昭關夜行晝伏至於陵水無以餌其口膝行蒲伏袒背肉袒以鼓腹吹簫乞食於長市卒興兵闔云云
陶靖節集巻三云鼓腹無所思朝起尋歸眠
狹川地蔵記云九當社午日礼尊者御々供御神楽湯立腰鼓以下臨時相撲法楽連歌等也云々
文選木玄虚海賦云於是鼓怒溢浪揚波更相觸搏飛沫起溝云云

和名抄行旅具云摽子 漢語抄云摽子加
礼比計今案俗所
謂破子其破子 摽子中有障之器也云云
讀和利古
靖玲日記云りぐなどものゝて舟のうちをかくさをおゝいをきものいけばこゝ

なりそろ菜のうちハ摽注をえてもるべし あさぢふの云々真淵云この
ものあさぢふハ淺茅生をとハ其物を生るまゝをいふあさぢを粟田まふ
を豆田など書さゞひなり上田秋成云水もなき池よつゝつゝるとハ渋茅
生の堅ゝある池のあせる也そつゝつゝといふを即漢さいふ調ゝさる物ゝし
だるゝごとまねゝ悪き物やもあゞ〳〵をと用をゝる事なり いとをゝし
り云々ここハ菜のをとをゝとをゝる役なり もゝつゞをうちてゝ云々
こハあくまでおゝるひてもゝつゞゝなどうちてたのしたゝふさまを
もゝつゞこのうち摽注をえゝべしゝハ故事にかりそうくた
いてるなりそを摽注よひろる文選の文をえそもやふべし
[illegible]
いまもりごうせくそゝくる人その名などぞやいま思ひ
いでんこゝろ人くそのまんと思ふんありてなりをとこのく

いひしく波のきよなることそう(定)へいひしく
くもるふうく
ゆくさきにもつゝなくおうりもおられて
なくんれやまさ(そ)くんとよめるいとたごゑなるべし
そそくる(そゝぐ)ものうわ(カイ)そのハいにのあ〳〵んこの玉をそれ
このまあれどもひとりもの(も)へしをび(ち)つべき
人もまご(まと)れどこれをの〳〵いこゞり(て)附ぬをのこゝろひ
て松ふけぬこの夢(秩)まち〳〵ぶといひてこちぬ

今又こと人のうごゝもせてそゝぐ人ありこの人此ハ何のとのや
いひしをれこう〳〵といま思ひごをべしとなりこの人〳〵のく
そゝくるをろれ我をこそ〳〵ひこゝろのこなく〳〵をそへある

真淵云あら礼ハあくといふ(ふ)なりいでくるもの
しるきすゐも越ゆるにも何やもこゝへ
そなけきこゝにやも良意ふてあくと良をなく
もをいふあら礼ハおうのまさいひなげきハ
そこうろをいひて「なおなじことれり」
源氏あづまやこの君ハさもぐまたげ(ゞ)
おわ(ハ)ゐ(ゑ)へのありれ〳〵うちうけやもいひ
うけてまゝ(ゝ)つれなくがおこゝもそ
いくるれ云
行宗卿集
かちびこそいくさおうなれこな人ろ
おくぐとのしもなづくとおもへな
真淵云いくりてハねをおむ(ゆ)まうにて、
そ〳〵る詠こゝハまのうろ礼バへりそ
おめてのこをぐ〳〵てへもせれり」
聞書ふまう〳〵もハまり〳〵んぼよ(ゝ)ゐ(ゝ)
うひべし〳〵おくろせ云」

ふなどとうそてうおう礼人と思ひてそゝれりとおりきそとくなおやのおい
いひてそゝくぞんまのにすあることでもいひてそそやおこ〳〵見ふいま礼
そ(ゝ)なりをハうふいべうまへなりをハうふいべうまへなりをハうふいべうまへ
やまる(ゝ)　おくくさ(ゝ)さ(ゝ)云ことの夢ハろろ時〳〵ぶ(ゝ)ご(ゝ)ゑなるべしとこのそのと
主あ(ゝ)なる礼ぞありもおうれてなくんるれやまさ〳〵んとおめるが波のそうり
ろがまのまさ〳〵んとあるをそそ大ごゑなんと紀氏のくりれなおぞろ礼いそ
れなり真淵の説よりうなるおよごゑなるべしをいそれ〳〵ハ従うう
このなべ〳〵とぞる後ま(ゝ)をつくべ〳〵そおぞ〳〵うる後ゆを次よりてろる
おうりハ哥のハいでおくうんともぞ李時云曲くさ沢なるおうなるとをゆるふ
砧の首途よ禁忌なりこれをのこりぐ〳〵ハ原本にいくこりてとれ
ど今ハ定家卿本為家卿本附注本羣書類従本などよいこゞりとあるに

よりてあるこむこの條ハ季吟の扁の守之抄をあげるなどいはれつるハいうに
こそ標注はあげくるる證と真淵の説とをえてあるべし　まくまおりぐぢといひ
て云ことハ標注はあげくる聞書の説などとくまくまおりんぢといふことなり今も
こゝ田舎の方言はやくまをゆくまをといひつゞけなどいふがごとしこれ
らもれやんぢのをれりあをぢおりてあるべし

ある人おもの
こゝろ〳〵ハなるおそのにいふまでもなく此歌の
ゆく人もとゞめまくおもふ
おもひてこへをいへるうへ

ゆく人もとゞめまくおもふ
こそぬまもまくおもふ
うつゝ〳〵それだにあるを
おそくをいのそせんおんなおくれをしつゞけて
くもあまれいのおもあれこそ
おこのれぬめり

ある人のこゝろ
ハいへるう又実ある或人のこゝろなれと例のおぼめきてある人紀のと
書おもこゝろれバこゝろ〳〵をいへるおそ畢下せることそなり

後撰冬おやのあよまりそおそく
くりくれバつゝ〳〵くる
人の出ぬめのやなりくる
秋世間おれあるやもろくる日を
きくこゝろもやくなバ〳〵とぞ思ふ
後撰正義云これハ貫之の女七歳まく
よめりといふ父貫之内裏よりおそく
くへくをまちわびてよめり家集ニ
ちくさのうわどハしとあり云く
大鏡巻八云西の京北をくの春まろ
こくこゝろこゝるまの中〳〵いうつゝきが
侍〳〵どありしを一〳〵ハへあるじ
本はこれもいこゝろまひてまちわれと
いとをそくまでうびしくべあるこゝろ
あそおおりてゆひ〳〵をなゆそをそ侍ける
じくれバかりまでうちひをを
ハこゝいうこゝくへんをあり侍ける

おゝ〳〵めされてなくなりぬ　那波こゝこゝの
さかをこゝろひれバつゝくれ例めこゝむを
めのをひおなりうこゝ
古事記云宇麻良水峡許志母知裏勢
麻呂賀知云云
伊勢物語
つくねつゝまろけ〳〵しまろがうけ
もきよけ〳〵なりもこぞるまよ
宣長云まろこゝをれかのれなどなるごと
さて師の説はこゝうまろとりこゝをハ
かゝさをもこゝろとりよむこゝをハ
なくまろなりとりをこゝてこゝなく
なりうなるこれ称なりといをれろハ
古への物言ともきこゝをそうこゝろやき
てこゝをおりもれ云く
続日本紀巻卅六云天應元年三月辛卯詔云
云大孝行者百行之基祭曾毛曾毛百足
之由乃至死不顧事君補乎多美止奈毛開食
云云
竹取物語云もくいおそるんさしいん
人よこゝおりんとおろをこゝ
宇津保物語云こゝろ云をゆくべきあを
いへとこゝうおろこゝをゆくべきなりく
真淵云れてこゝをおこしていふ詞を
こゝへてこゝもくこゝおりもハ助字なり
もをこゝへていふ古言なおり」
ヲ并ホ十二
桐見歌為者役君色吾曽益而伊布可

忍美為也」
今撰まるゝなどにゝ川よろつありひとつハ伊勢の国なるかざご川ハそハ後撰離別にさとこの伊勢の國へまかりけるよみ人しらず
君がゆくかたにありてふなきさ川まづはそでぞなかるべらなる これハ伊勢の国にいま一つハ陸奥にぞある
相模集
うちのくれぞでのまろかりかきさ川 こゝも
んのうちになかれてぞゆく
陸奥にいまひとつハ名所にあらずして渋を川にたとへしにこゝなるも名所にあらず
渋を川にたとへてかきぎハとハいへり」
書紀齊明紀云于都俱之枳阿餓俊[カ]枳古弘飫岐底[カ]簓庾[カ]舸武」
書紀持統紀云四年夏四月癸丑賜京與畿内耆老耆女五千三十一人稻人二十束
和名抄老幼類云翁老人也和名於岐奈又云嫗和名於無奈 老女之称也
宇津保としかげに云いとうらさしきなかにおきなこともうまごなどねて云
同藏開上云ゆきをいくてきこくるおんなおきなをひとかひとつて云
栄花音樂云おいくゝろきまかりへぞあるハ七八十のおんなおきなつゞまりそたの

このすハ標注に引る宣長の説に證とをえてしるさまほしべし かなでんやハかゝ川べくハ云ことハかなでんやハかゝハせどされどもしるつべくハちやくいへとなり 一首ぬのまうらんとて立ぬるをまちてかくるるをもいそんとてつゞれどの歌けぬれたむやあらんやかてそのまへろへりさりぬとなり そもくハ語をいひかえ(?)
ことわり語例標注にあり いづれ(?)しハ字類抄に訓を例せり審なきにあらず 標注をえるべし せく人もさまるも袖のさくろ語のこゝろあやうけし なるさ川ハをを渋をつくいをんとて川おなしくいへるのこなるべし 又ハ土佐まさゝ名所ありてかまへて渋いにて三つばりそれ標注をえてあるべし 李吟云ニ紀の唐(?)にゆくさきにといひおかれてなんといふをうけゝくやく人もとあるまであれ このくハかりのかみ云く 聞書云この事かもよくよそくる納らぬとあむること八かり うへかしされバかのおんうかゝつぎしハとろ子をうつむしとおかれむをいへり古事

かしきもの出ていでくもちたるさま云
同楚王夢云又世の中をむかし見たるおんなかるなまぐらるまうなることえぶなからぞなく十そへる云くそのハふな翁と嫗とかて翁方をいへりされどかきられかといひて老女のことゝのこゝせる證もあります 枕草子云あな こゝもあかのまねるうしやよしくゝかくのそうなまかりぬめりとてくきこしめしてかきられ女に驚りしかきるを見へなど云とある八老女とのきいへりされどこゝにおきなおんなをいふべしとあるハ翁と嫗あるまぢきなるし」
三代實錄卷三十七云元慶四年五月二十八日辛巳從四位上在原朝臣業平卒業平者故四品阿保親王第五之子正三位行中納言行平之弟也阿保親王娶桓武天皇女伊登内親王生業平業平體貌閑麗放縱不拘略無才学善作和歌中略卒年五十六云云」

記萬葉などに變をかくしとあることに以呂波字類抄に慈變親などをものかきと訓せりこハされど變をるかりけるかやあく人云ふも世ハ[一字不明]にもあるゆゑ[一字不明]いへハもろハの云ふかそれ何れハせん出つるハしろねハ姫や翁の云ふなりといふとおまことしくおもへるとなり おんなおきなれ云く李吟云さんなおかきされ年よりを翁といへバ老女のうすにうけるかやといはれつるハ誤なり案 おんなおかき なハ嫗と翁とかくらんをハ標注にひける證をえてもかなふべしこのぞり原本おんなおきなれてをしるべしとあまど誤なるすらかるなれバ今ハ定家で本為家卿本扶桑拾葉本群書類従本等によりてかくさむ そこらわあるハやらんとてかれぬめりとハ李吟云かれぬめりとハ紀氏のていとこの歌女のうけるゝ云ことの誤きりてハ又たなりもあるバ中らんとてまつうちおかれしなり
八なさけるすあかなく[おれたイ]らねおかれど所かなりことひ[のイ]尻とん

なりひら朝臣

おそのくにほさきもとの□□□□
ふのをもみげていれどもわ□ん
六帖四　　文則
□□□□□□□□□□
人のこころをいかでとらん」

後撰羇旅上佐より任はてゝのぼりけるに舟の中にて

貫之

てる月のなかゝゝしきに

金葉秋

源師俊朝臣

いつのまにくもゐんあまのゝ
なかゝゝほをえばしるべと」

博物志巻十云舊說云天河与海通近世有人居海渚者年々八月有浮槎去來不失期人有奇志立飛閣於査上多齎粮乘而去十餘日中猶觀星月日辰自後去転々忽々亦不覺晝夜去一旬餘日至一處有城郭狀屋舍甚嚴遙望宮中多織婦見一丈夫牽牛渚次飲之牽牛人乃驚問曰何由至此人具說来意并問此是何處答曰君還至蜀郡訪嚴君平則知之竟不上岸回還如期後至蜀問君平曰某年月日有客星犯牽牛宿計年月正是此人到天河時也

ことをもある人のゝありけるとありそも紀氏ふみ□□□□
ある人とその例のおほくおやのゝ□□□□□□□□
博物志の故事をおもひよりそよまれつるそハ標注よりけるなるべし
なるべきのゝ

九なつのゝ

新撰字鏡云曉暸 晓 同上也又日初出時也 明也亦止也又阿含反

枕草子云なつのゝあけぼのゝ

拾遺哀傷　　仙慶法師

くやしくもいかでかけさせてしかな
つゆをそのこゝろのなゝりなり」

和名抄國郡部云土佐國安藝郡安芸

新撰姓氏錄第十七云長谷部造神饒速日命十二世孫千速見命之後也」

遊仙窟云忽把十娘手子而別行至二三里廻頭看數人猶在舊處立余時漸去遠聲流已絶顧瞻不見惻愴而去行到山口猶有而過云云

大和物語云東八舟のゆくをそとそこもとを舟よりこえ人の車をうるとそおもてをさしいでてこぐ舟ばとくなるまでにうれいをもちひさくなるまでにれいがとこう云々

義經記云たがひよきもやおそうべうそへ爭さがてゆくべうひろう差にのぞうえええうきこえつおつうきこえおとうえをたがひよそこのうえぬをよへぐてがひこのひぐくなどをめうくくる云」

貫之集

もろくゆく名残おくとおもひやるかりともよそびねをぞする」

ましくゆくうれおくんとそこの人どもかなしきこるこうくてこぐさ四くまふくく海のわとりよとぐもこる人も

こゆくなりぬ（雁）あふみの人もえそびなりぬ落あふことうあるへしこ

いつるすあるへしこ

こうれどこのをひとりごとみくやくぬ

思しやるうをそうれどもふくなるれば

つとそ早朝をいへる老新撰字鏡ト日初出時也と注せるごとし

なハのとおりハ和名抄ニ奈半とあると同所あるべし　藻ホ言実摘要衡この

をくりいさこたくそくる人七長谷郡行政ら郡人ハもぐりそくそくう父祖ゐ心

うも　長谷郡行政らなんことあるなんの二字を原本脱せり今ハ為家ヲ

本故系抬葉本羣書類從本なごようりそおさなみ　江雜ようりそおさなみ　日本

云く江雜ようりそおさなみ

まごてこぐくをバうを人のやうたりけれバ紀氏の雜ようりそおさなみ　江雜ようりそおさなみ　日本

まひーりもろべー　この人ごそ云く原本このごのごを脱せ今ハ為家ヲ本

抬葉本類從本等ようりておさなみ　今ハこぐさなれてやくくくそを

大湊をこぐさ舟をくくもと土佐の國をこぐさまあべ　このくて

こぐさ四くまふくくやとへるごと　海のわとりよぐ

ある人もろくありぬあの人もこそなりぬこくこの文標注ヨ引くる

遊仙窟大和物語義經記などの文ヨ似ゟ大和物語もこの書ようり

ようてこぐさを　舟ももあるあるごもこひなれバこの舟をたなびゟ

ごとよりひてやくぬとなり　四人やるこくこ注ものこくハゟひやるん海を

もそれども文そ
そ
れバこそといふ
れバこのく千
いくそばくいく千
せ枝ごとよ
えもゝゝ
共
ごとゝそ
ゝよえ
宇多の松原ハ

古今 雑名
花ごとのあるもちらゝゝ風なきをバ
いくそばくとかゝるこゝろにとハそ」

万葉三
何時間毛神左備甲斐乃国鹿背山之鉾椙之
本尓薜生左右二」

同十長歌
真梶繁抜撰荒木葉曽曽世丹吾妹」

万葉二
後将見跡君之結有磐代乃子松之
宇礼乎又将見香聞」
妹之名者千代尓将流姫島之子松
之末尓羅生萬代尓」

書紀神功紀歌云宇摩比等飛子摩磐
苔奴知野伊徒姑播茂伊徒姑奴池表」

万葉八
黄葉乃過麻久惜美思共遊今夜者
不開毛有奴香」

妙ナレ

群
ど定
うよ

の定

ちとせイ

土佐上 三十三

六帖
とがやまの松のこずゑもむらぐもを
る世もすゑとやまべらなり」

苑田などゝ名所あまたこゝなる當國ハあらじ　いくそばくといふ
松のたちなみなるをゝ幾十許のことゝ思ふべし　もとゞゝあを松のまゝを
ごとゝいへるえ真淵云のごとゝ本のまゝをゝ本とゝゝを本とゝゝ
万葉ゝ鉾椙之本尓又本葉もそよゝ尓ごとゝそ　椙とゞゝ云ゝ季吟云
とゞゝあを飛ぢゝゝ掘取このゝゝ船中に入なるべし　えゝゝ
せバ松のうれごとよゝ季吟云れハ上云ゝこの説得ずうれゝゝ
ゝ松ゝゝごとゝゝる證ハ万葉ゝ未の字をゝゝとゝゝ又宇礼とゝゝ
れゝゝ音うえゝゝ
共の字ごとしそゝ
この名のゝゝ
ゝハおとれりとゝ

宇津保初秋云さるおほんかのてけのまじしもいらもちまちつぎみえる人のいへ云〻
又菊宴云おほんともこゝろつねてよろづのおほかみふなをくにかのうねどもみそこぶハせて云く
住吉物語云西さしてふねにのりくるものどものあはれさまぐにしてつゆのさぐめぬこし此ふね松とうくひてこぐ西くもなくハぬこゑしてあはれなりと云く
又云おとくさくりこぎくる舟にハかぢとりさくさをそかくさひうけるおどろくかをさもがなるもしうりかうと云く
文選漢武帝秋風辭云泛樓船兮濟汾河横中流兮揚素波簫鼓鳴兮發櫂歌
注云櫂歌引櫂而歌
三輔黄圖巻四云昆明池中有龍首船常令宮女泛舟池中張鳳蓋建華旗作櫂歌雜以鼓吹櫂歌謂舟人歌也
小補韻會巻四云欸乃歌棹船相應聲云〻
宇津保藤原君云いくてやまをまるかぢとりのうたのおもかげをさらぬひとう云〻
和名抄夫妻類云姑尓雅云夫之母曰姑和名之宇止女云〻

かくあるを見つゝこぎゆくまにまに山も海もみなくれ
夜ふけて西東も見えずしててけのことかぢとりの心にまかせつ
をのこもならはぬハいとも心ぼそしまして
女ハふなぞこにかしらをつきあてゝ音をのみぞ
なくかく思へバ舟子かぢとりハふなうたうたひて
なにとも思へらずそのうたふうたハ
春の野にてぞねをバなくわがすゝきにてきる〳〵
つんだる菜を親やまぼるらん姑やくふらんかへらや
夜べのうなゐもがなぜにこはんそらごとをしておぎのり
わざをしてぜにももてこずおのれだにこず
これならずおほかれどもかゝずこれらを人のわらふをきゝて海ハ

万葉四
野干玉能夜渡月之赤好者吾手還多之
路之長手呼
雲州消息下云位記只今所持参也夜部入眼云〻
万葉十一
朝茅原小野印空事何在云公待
六帖二
なをつけてとまりやしすらんさうかのいとまなきかくさそうさおぼせを
小大君集
まりかりやそうそとにかゝりうちひてゝきろうまぞあらんおとやハ云〻
新撰字鏡云賖式邪反貰也於支乃利
以呂波字類抄云貰賖貸同上
尺素往来云於清貧之身者頻于市賖貸
下村酒云〻
周礼地官司市云以泉府同貨而斂賖註云民無貨則賖貰而予之
伊勢物語
おかしくのさまよめてよみえるうくにんハなるぬうくゝうねとも
和名抄老幼類云古老和名於岐奈比止今按云古老又一云老舊一云日本紀云老宿上同

あるれども心ハすこしなぎぬかくゆきくらしてとまりに
いたりておきなびとひとりたうめひとりあるがなかにこゝち
あしみしてものもものしたばでひそまりぬ
山も海もみなくれと云くらきに日のくれゝバ山も海もくらくなりゆく
かたきをいふなるべし　てけハ天氣なり宇津保物語に天下といへるてけ
をてけとあるおもあるべしさてかぢとりといふものハ天氣などをもよくさとり
知るものなれバ天氣のことをかぢとりにまかせつとなり　をのこもならはぬハと云く
これそのまゝにてよろしき海路の旅になれざる人ハいと心ぼそしといふ也をのこも
とひきてまして女ハおそしといふべし　このくだり云く海路の
旅になれざる人ハ男も女もかく心ぼそくおもへどもかぢとりハ何とも思ハぬを
ふなうたなどうたふを　ふなうたうたひてと云くふなうたハ住吉物語字

枕草子云をのゝしりねるおきな人ちかき
うちそてつゝもうくしいそぬを云〻
和名抄老幼類云専日本紀私記云専二字讀大宇女于佐女毛波良専一之義也太宇女者毛波良之古語也今呼老女為太宇女故次於負耳
源氏東屋云ふゝしひのやうにおそれ給ん
もいまさらにいかゞさかゝかへてまじく
てなんとさこ也云〻
新猿楽記云野干坂伊賀専之男祭
叩蚫苦本舞云〻
宇治拾遺巻四云紙くゞりてこれつゝもて
まいりてうちやるなどするをみせん
とひたれバ云〻
宣長云老女をたうめといふハ姥のうち
きなかやわらんさてそのうちめに専
の字を用ひたるハいかなる由よち詳ならねバ
しくハ嫥と通ふうこの嫥の字から老
女の意ハえきられども御國にて字義
ふ非る意に用ふる例も多かれバこの字を
用ひてへんをうぶるかかやわらんとハ
うたくもわれるさといへ老女だ
称なりし
真淵云あるともふハぜしてねたるあり

津保物語などにも見えたり又漢土ノ櫂歌欸乃歌などいへるもふ吹歌なりそハ
標注に引くるをえてあるべし　去の世よそでわすれバなく云〻ここ去の世
ゆくこがるゝにおもとるるよもいとハぎ事にならさつほゝくる葉を
といへるなり　叙やまちかへらん去りとあやなくかへらん云〻原本叙や
まちかへらんとあれど誤なるヘり昨らかなれバ今ハ定家卿本拾葉本類從本
異本などによりてあらためさてまちかへるハむさかへる也つゞかへるさへ貪らん之
むさの反まちかれバおのづくまちかへるとなるなり宇津保物語にまちかへるとあるも
同じ　くしやを云〻李吟云くしやハくへらんやといふこころかや又くこのへしある
べし催馬楽にさきくんぐらやといへる歌に云〻この説などもうかゞへんやまそやハ
つけていふ意ならん　そこのゆれいとハいバゞ　さいる豆の手のもくしやといふ獨みえ
あり上田秋成云これハ舟子共が誤とるん也　称紋の葉をぞ云〻この文諸本

源氏帚木云ふたへくちをおなとおうき
くるハえあやなく／＼いひあへらうまで
かりしゝバ云〻
顰ハ字類抄云顰とみ
和玉篇云顰ときか
玉篇云顰蹙憂愁不樂之貌

によなくしてらんべのうなゐもぶなせよこそん云〻といふ文なりの無けれバ文を
この原本に脱せしものとも思へどかく〳〵考へみてまでもとよりの別種の本にハあるまじ
きをり文諸本にのせてる文もよく〳〵みつゞくことの本説ごとくあて八文字の数ハ本
くなされどかへりて諸本の本文よりもよく〳〵え意も昨らかなれバこの本説さ
まさ本をむこの本说本文とおぼき本資慶本と異本説しらに一本なえるの案
そうごとをせしておざのかまざをせして云〻そうごとハいつなりとおざのかまざハ
真淵云相をかりて代をやしておくといふ云〻殆標注をえべし　これなるに
おかれれど云〻このやう説る云のおかくれれどふかくきえ　おきれ人ハ和名抄る古老
を訓ぜるがごとく老人をいふなりかも　和名抄に呼老女為太宇女とあるごとく
老女をいへり猶ふハしくハ標注をえてあるべし　さて下文よ淡路のさうめかなと
あると同人なや　そのもものし猶ハで云〻こハ食すをざるよせぬをいふなるべし

和名抄國郡部云安藝郡室津（早吉郡）」

九條殿遺誡云先起拭偽星名字七遍（敏音次取鏡見面見曆知吉凶次取楊枝向西洗手次誦佛名及可念尋常所尊重神社次記非日事（事多日日可記）次服粥次梳頭（三箇日一度可梳之日日不梳）次除手足甲（五箇日一度）次有可出仕事即服衣冠不可解緩云云

礼記内則云凡内外雞初鳴咸盥漱（カミアラヒクチスヽグ）衣服敛枕簟灑埽室堂及庭布席各從其事云云」

和玉篇云乃（ナホシ）」

平他字類抄云乃（ナホシ）」

源氏靖玲云ものゝふのことをしてなくさまざまのことどものありさま」

十一日 なほ那波のいそのまつよりつゞく

なほ那波のとまりをおしそとおもふ

十二日 今日十日なれど舟をとゞめつれば

十三日 なほ那波のいそのまつよりつゞく

なほ那波のとまりをおしそとおもふ

十四日 なほ舟をとゞめつれば

十五日 なほ那波のいそのまつよりつゞく

なほ那波のとまりをおしそとおもふ

十六日 なほ舟をとゞめつれば

十七日 なほ那波のいそのまつよりつゞく

なほ那波のとまりをおしそとおもふ

十八日 なほ舟をとゞめつれば

十九日 なほ那波のいそのまつよりつゞく

なほ那波のとまりをおしそとおもふ

廿日 なほ舟をとゞめつれば

廿一日 なほ那波のいそのまつよりつゞく

なほ那波のとまりをおしそとおもふ

廿二日 なほ舟をとゞめつれば

廿三日 なほ那波のいそのまつよりつゞく

なほ那波のとまりをおしそとおもふ

廿四日 なほ舟をとゞめつれば

廿五日 なほ那波のいそのまつよりつゞく

なほ那波のとまりをおしそとおもふ

廿六日 なほ舟をとゞめつれば

廿七日 なほ那波のいそのまつよりつゞく

なほ那波のとまりをおしそとおもふ

廿八日 なほ舟をとゞめつれば

廿九日 なほ那波のいそのまつよりつゞく

なほ那波のとまりをおしそとおもふ

三十日 今日十日なれど舟をとゞめつれば

なほ那波のいそのまつよりつゞく

なほ那波のとまりをおしそとおもふ

ことなれば人くるまよそふねなどもおほかるべし

室津は土佐國安藝郡なりそは標注をみよ

都へもこゝなる「一定ナシ」

都へもこゝなる「一定ナシ」

和名抄羽根（體云翮亦雅集注云羽本曰翮和名抄云一云羽根也」

ねをうけてさしぶかごとくなとハいへり

男も女もいのそ(為ナシ)こく都へもこのねをやみあれをうち
ふのよ(為)うとあをねうねどげあと(為)思ひて人くもそまひ(て)
このもの(と)といみねとふまうハのついでなそまうさむこの
ついてに人を(ツイ)ゆもいでゐいづまのほめのうたもかハいみ
まうくそのこのねむ(やうそ八定)をそうしほの人のこうひ(定ナシ)
ねをふうのようひハうそぞこのへるべうなるといみうをおもひいでて人をのもる

古今醫旅　　(ナシ)人一首
(ナシ)ゆくりをなくあるつれてこ(ナシ)
ひハうへをうへるべうなる
左注云この歌ハわれ人男女もありよふ人の今ま
うまうをとまりつうらうてもなハちまうう
ふれハ女ひとりあへうあるあよ人る屋の
かうさうをそうわりとりんず」

後撰雜一　　菓浦朝臣
人のおやとハやそよあうねとも
なをやつれてよまどひぬるう(ナシ)
同意一　　(ナシ)人一首
(ナシ)人おもハぬ人乃おもふ人
おもハざうなんおうふ(ナシ)
新恒集
おもへどもおもハぬ(ナシ)
(ナシ)ふ人とうあこ(ナシ)」

とく於へうんとうみをうあれバけをうひてうれんうをれバとも
むうれ人ハ在國のうう(せうナシ)うう女をいへり原本よむうれ人とあれど
誤なるうう(ナシ)うるれバ今ハ定家本拾葉本類従本異本等のよりくあう
うむ　なハまうてといへるハこの女うへのおうよこうなどをうんでうきて
まぎれ女なをおひのぎせりとも　此行事に云こゝをひとうふものハ何よ
うへぞあるをみあれどこをうあるやひハなりとうやひとの給を
こうう(ナシ)く一首をなせりこの例標注まあげうり　こいひつなん云こゝ
まぎれこをおうのれめるんをふくめそうぞめるるなり

十二日あめふりぬ文時雄茂が舟乃おろれうれ(鳴津)
なうら(ナシ)つう案むろつまうぬ(つま)(なう)
あめふりぬハ(ぬのあうぐきをうれうきをうあうぐるをりふ　季吟云

貫之のように時々こそあれ八梨壺の女人ばらもしきまこを文時とうけるも但諸本かくのごとくなるに今あらためず又紀氏のほよ普三品を文時とのみひ平維茂なども皆しかく侍り又紀氏のほよ普たゞ紀氏ばかりの人々なるべし鳴津は今大湊なり

十三夜

男女こぞりて

新拾遺秋上　刑部親輔

古今離別云源のこゝろをつゞけまううる歌なり

真淵云ありうるかりそめ津のあそんの家ありて陸奥のかみなどもきあとゝもおもしろきあとゝも」

新拾遺秋上

そこのそこにもおもかげをとゞめてやどる月かげ

今のなどゝうりいづる月うげ

新後拾遺秋上

うつゝともなくおもかげをうつしてもある秋の夜の月」

源氏須磨云海のかなたよりうのめにとるとこのおそし云

河海抄巻六引竹手丸記云大夫於途中為龍神被取端正美麗之故也云

太平記巻十八云昔八知何様竜神ノ射宝三目ヲ射ラレタリト覚シ何ブセ皆海底ヘ入ヨトテ乃矢矢ヲ刀鐙腹巻ノ類ヲ盡ク投入ケレ共猶敵ニ向止ズ扱ハ甚色アル紅蓮ニヤ目ヲ見入ケルトテ云

西陽雑俎巻十四云妬婦津相傳言有婦人渡此津者皆壊衣粧雖依敬潜ズ

義楚六帖巻十八引西域記云拘巽國有清海周千餘里時苦魚鼈交集無敢取者其國行人不得赫衣高声災禍立至行旅咸知云云

和名抄鬼神部云海神文選海賦云海童即海神也日本紀云海神（和名和太豆美乃加美）

真淵云國を立ゝりくるまでハ船ゆをもをーがさにいでゝもでゝ陸よりさきそ湯あをせんそ人の家よりくる衣のあーをもをひてそれをとゝるべくとあれど誤なる事ハ為家ゐ卒拾葉ゐ

ぐ女のふるきうよあんひてといふ綱ハありそもくとのへをかゝりそくく書ざまゝ」

聞書云行のあーうげまことづけそとハあーうげハ悪ー氣とゐんそかやをもまことづけそハをを詫ーとゐふをこ一説ゐ芝簷とうくともいへりあーうげとつげとるハ何のあーげなるすあんと云ども又ゝ衣きねをたすもなきすあとゝもうき衣きねをたすもなきすあとゝもうをゝハ糟屋さをを蕙なくゝをとくるいやしき家をいふつまハ家のつまゝ則

なよ竹のかぐや姫こそれなるべくよゝぬきたれハ

海の神よおだしくふきわたれ

づくくわたつみのつまもあるぞそ

んふもあるぬそざやもわけくそゝる

ありハかとうくなどいふは同じうあしき氣ハあらんよう

よりうくまでをーがさにいでゝもでゝ陸よりさきそ湯あをせんそ人の家よりくる衣のあーをもをひてそれをとゝるべくとあれど誤なる事ハ為家ゐ卒拾葉ゐ

ぐ女のふるきうよあんひてといふ綱ハありそもくとのへをかゝりそくく書ざまゝ」

聞書云行のあーうげまことづけそとハあーうげハ悪ー氣とゐんそかやをもまことづけそハをを詫ーとゐふをこ一説ゐ芝簷とうくともいへりあーうげとつげとるハ何のあーげなるすあんと云ども又ゝ衣きねをたすもなきすあとゝもうき衣きねをたすもなきすあとゝもうをゝハ糟屋さをを蕙なくゝをとくるいやしき家をいふつまハ家のつまゝ則

類楚本異本などハ海神とひて云ゝこハ海神といふの物ぞもるものゝすなをそ

ふ神よおだしくふきわたれ

それなるこくうるハきうき衣などハ海神よおだしくふきわたれ

注よもるぐごしーさそこの文原本海の神よおだしくふきわたれ

ひさしなどのをいへりいまだに飯鮨あり
またしあはびは鮨にしたる鮑などもあげて
みせたるは脛をかかげてみせたるさまにて本文の
ふも湯に入る女どもの上る里へいやしき穂
屋なればそのひさしなどには飯鮨鮨鮑
ゆうの塩魚多くてさがりてあるなど なり
貫之ぬしもいられねど脛をかかげて女どもに
みせてうやうにむかひ見ては灸のつま
とりあげてありく人のごとく見る詞也
李吟云この一段義わからぬなり行のあし
かげとは芦蔭といふべきをやと忘れて行のと
ことづけてはうとつけてといふ不やの
いひさる詞をもぐる書つけたるにや
つまのいぜしとは穂屋の妻也蛎蛄鮨之
和名の貝類にいそく蛎蛄 和名 其貌似蚓
而大者也ちかなる芦の穂をそあげる
屋のつまつくるあるもののごとをいふなり
又一説に保夜交鮨といふもの延喜式にあり
是梅干といふものをまじへつけたる鮨也と云々
此説もいぜしと猜るものを押てあやのつま
をしと落しせんすへなど猜りし杼れ
ども学者のこのむ所にあらずかふべし也し
わびは鮨鰒也是も延喜式に猜り女も
あらぬと云はむなかぬなれそ幽徳に
ふもあらで猜るる人といへる同じぬ
ちぎにわけても脛をかくはたかげ
て猜きなどにおりくらなくまの古今
にいかしうとまろく女をそさにわけそ
云々此五のさまざまにわげて穂のすそなど

なるすあるれど定家で本拾葉本類従本異本 などよりありてあらくも
行のあしかけにとつけて云々こよりか下すべて誤字脱文ありとおぼしくて
ころえがたし契沖阿闍梨も古今餘材抄にこの文を引てこの一段まだて
わかりがたしといはれ李吟真淵なども同じくわかりがたしといはれつるがごとく
いつれもわかりがたしされど諸家の説をも標注にあげられば人々の心々に
まかすべしさてその諸家の説いづれもものに説なくわかりともいひがたし
いまその説をも下にあげたりこはしとも思ひねどただ思ひところをいへるのを
なりさて行のあしかげにことづけて云々とある行を海の誤なくあしかげは
李吟の説のごとく芦蔭なりとをつげはかとつけてといひしるはいくこの
日記のおりかうくといふして女のつけるお面をそむきかくれつまはまを
みにあそんべきところを女の心をそむべしちがはりあぶむとて陸のおり

しりあけしていひさて此日記の心ばへのゆ
あとしは残きにはさて枯のふりたる芦
のかげなどを道遥せるにふとつけたるの有
あかどんものわかぬさはわかるは上のき
わびおりくらむさて人さはるさせると是
さして興なきおなればものもあらぬと
いへるなるべし
真淵云行のあしかげは説はなるにたるの
こかげにかんとてとはいふを形るを浦辺
なればあしかげとつげたるは若がとう
けにまそかげはなしかといふに同じかは
延喜式に参河國保夜一斛とあるもかく
あきうるなり穂屋とそはなかなかきこ
えぬいぜしは蛎蛄にはあらぬ和名抄に
貽貝 尓雅注云貽貝一名黒貝 和名 伊 加 比 延喜
式主計式貽貝保夜交鮨とあるて蛎蛄か
らねすある
谷川士清云五雑組に海鼠一名海男子
其状如男子勢然淡菜之對也とみえ
余皇日疏に文蛤似女陰とよぶ文蛤も
淡菜なりいがひをいふ又東海婦人の
名あり海錯録に雑謂之東海婦人耶
當謂西施不潔といへりさればは陰陽の形に
かたちるを妻とかくいはれいへるなるべし
宣長云肥前國佐伯の海にあやといふ
ありあり紫色にて海鼠のごとくなる形し
たるものあと佐伯の人かたりき されはあや
のいぜしとあるはそれを飯鮨にしたる

ゆきてさそふくさは海ほとりまれいりたる河の芦陰におかれたをとおこしたら
はゆるにえねばそれをなとつけて夜をそぎまでこのげて水のなかりまでありり
たちてみの中に入るにあやのつまのいぜしあしあはびなどをみせるなるべし
まそそを用ゐたしたるさま女の心さまもあるべしあやのつまのいぜしは真淵の説
のごとく式に貽貝保夜交鮨とあるこれなるべしつまは妻の義にあらで交なる
いかなるべしすべて物に物をまぜて交へるをつまとせるといへるがごとしいぜしは
貽貝鮨にて保夜をつまにしたる貽貝鮨なるべしさてこはあひて心をもいへる
のにまてて古書おそまきまへりてさるすがらもあわてるをあひていひとなんそれが
ひがことともいでたるものなればのくいへるもあわくれひがことなるべしおくれか
なら一章わかりがたし猶つのく考ふべし文考なるにこの原本と附注本と異本
とのさにえらぶおとあわせて諸本にたちてなどのさの字なしそがなもとある

なるべしとある人いへり又云ちぎさにあげてゝ人はあをかくとありしえをたるを古の船にちぎさにあぐといふことのありしかるべし」

延喜主計式上云貽貝保夜交鮨云云

同内膳式云參河國保夜一斛云云

同齋宮式鮨鰒二石云云

同主計式上云鮨鰒貽貝富那交鮨各四斗六斤云云

和名抄亀貝類云老海鼠漢語抄云老海鼠 保夜俗用𪉌 保夜二字

又云貽貝介雅注云貽貝一名黒貝 和名伊太加比」

古今 俳諧 藤原兼輔

いつしかとまたぐ心をはぎにあげてあまのかはらをけふやわたらん

落久保物語云かのりをはぎにあげてさつるよ云云」

雜令云凡月六齋日公私皆断殺生 謂六齋 八日十四日十五日廿三日廿九日卅日

拳吟云ことに正月五月九月八年三とく持戒精進して一切の罪を消滅ましき」

多武峯少将物語云ことしこの月の ...

海をわけそのてけをかざるべきなりこのてふ字をかざる海ハいかゞとあるによりてちぎさにあげぞまんぜなるといふをよなれりしろしるる海をまんべきにしてきかくいひしされバこの字ハ衍字なりやあるんまくハもの字にころなしとえそもあわぬべし

十四日あかつきよりあめふれバおなじところにとまれり

舟君せちゑす（節忌）さうじ物（精進）なけれバむまときより後にかぢとりのきのふつりたりし鯛に銭なけれバよね（米）をとりかけておちられぬかゝることなほありぬかぢとりまた鯛もてきたりよねさけ（酒）しばしばくるかぢとりけしきあしからず

舟君ハ船中の主君といふなるべし紀氏ミづからを例のあそ人のやうに

万葉十一

息緒吾雖念人見多社吹風有數々應相物

古今雜上 よみ人しらず

わたのはらよせくる浪のしばしばもみまくのほしき玉つしまかも」

延喜主水司式云正月十五日供御七種粥料米一斗五升粟黍子薭子葟子胡麻子小豆各五升塩四升云云

拾芥抄引世風記云正月十五日亥時煮小豆粥為天狗祭庭中案上則其粥凝時向東再拝長跪服之終年無疫氣

公事根源献御粥条云寛平のころより年毎にこれをたてまつる云云

いへるなり せちゑハ云々隋書云せちゑハ八六十四日也六齋日なれバ精進潔齋するをいふせちゑハ節忌とかく下の二月八日の段にもせちゑすれバ魚をもちひずとあり十四日八日いづれも六齋日のうち也 さうじ物ハ精進物なり船中なれバもの不自由にてさるべき精進物もなかれバ午のはじめ後に精進をやぶられぬとハそのかぢとりがつりし鯛にかふべき錢なかれバ米をつかハしてかへて精進おちせられしを よねさけしばしばくるハ云々しばしばハ万葉に數々をしばしばとよめるがごとくよねさけなど數々かぢとりにおくるをいふ數々おくるをいふ されバ甚けしきよしと也

十五日けふあづき（小豆）がゆ（粥）にずくちをしくなほ日のあしけれバゐざる（膝行）ほどにぞけふはつかあまりへぬるいたづらに日をふれバ人々海をながめつゝぞある

荊楚歳時記云正月十五日作豆糜加油膏其上以祠門戶先以楊枝插門隨楊枝所指仍以酒脯飲食及豆粥插箸而祭之
續齊諧記云呉縣張成夜起忽見一婦人立於宅上南角舉手招成成就之婦人曰此地是君家蠶室我即是此地之神明年正月半宜作白粥泛膏於上祭我也必當令君蠶桑百倍言絶失之成如言作膏糜自此後大得蠶今正月半作白膏粥自此始也」
以呂波字類抄云膝行ヰザル
或人云ゐざるハ膝行ゆく舟のおそきをいへるなり…
和名抄ニ説文云艤字亦作䑸 船著沙不行也と…川の
…同し
今按ずるにこの説誤れり舟のゐざるはあゆみおそく…
下文二月九日の条に川のみなそこなれバゐざりゐざりて舟の…
膝行するごとくともいふべし」
源氏物語紫云…云々」

そ(め諸本)のわらハのいへる歌
たてバたちゐれバまたゐるふく風と波とハ
おもふどちにやあるらんいふかひなきものゝいへる
にハ(資ナシ)いとにつかハし

正月十五日小豆粥のことハ標注にくハしくて舟中なれバ粥など不自由にて正月
十五日なれども小豆粥をもえにぬからくちをしとハおもふくの文字にこゝを
ふくめてよめるなるべし　詞をつけてきくべし
猶日のあしけれバ日よりのあしくして波風さわがしきなどしてゐど
まるをいへり　ゐざるほどに云くゐざるとて膝行にて舟のすゝみかねて
おそくあゆむことをいへり　今廿日あまりへぬるとハ去年十二月
廿一日よりいでゝ今日ハ正月十五日なれバ前後廿日あまりとハいへる也

かくいたづらに日をおくれバ人々ひたすら海のおもてを
ながめをりつゝながきゐてくるしくなるべし　風波さわがしき
ゆへに波もたちゐをもせバふく風と波とそおもふどちならんとハ
いへりさて此歌もいたづらにねをおくるにあまりなることをうた
へれくふく風と波とそおもふどちならんとさへいへる也

土佐日記考證上終